

# アルカディアアの誕生・ウエルギリウス

三石善吉

## 目次

- (一) ウエルギリウスの生涯
- (二) 「牧歌」の時代
- (三) 「牧歌」の世界
- (一) ウエルギリウスの生涯

ウエルギリウス研究の古典とされるジョン・コニントンとヘンリー・ネットルシツプによる『ウエルギリウスの作品  
注釈』(二八九八)によれば、ウエルギリウスの古い伝記は、テイペリウス・ドナートゥスのもの、プロープスのも

アルカディアアの誕生・ウエルギリウス

の、セルウィウスのもの、スエトニウスのもなどがあり、スエトニウスのものが完全なものではないが最も重要という。またジョン・E・サンデイス卿の浩瀚な書『古典学の歴史』<sup>(2)</sup>（一九五八）によれば、プロープスは紀元一世紀ネロの時代の人でウエルギリウス批判の第一号であり、ティベリウス・ドナートウスとアエリウス・ドナートウスは紀元四世紀の文法家でウエルギリウスの作品の注解者でもあるが、そのウエルギリウスの伝記は、いずれも、ネトルシップは次にのべるスエトニウスに依拠して書かれたものと見ている。

スエトニウス<sup>(3)</sup>は西暦紀元七〇年頃に生まれ、一三〇年頃没しているローマの伝記作家であつて、『ローマ皇帝伝』や残巻『名士伝』で知られる。『名士伝』はローマの著名な詩人、雄弁家、歴史家、哲学者、文法学者の伝記であるが、今日残っているものは文法学者の伝記の前半部だけであり、詩人伝中のテレンティウス、ウエルギリウス、ホラティウス、ルカヌスの伝記は「何人かの詩人の作品や古注の中に転写され、しかも抜粋か省略された形で、または改悪されて残っている」にすぎない。ネトルシップが「現存テキストは完全なものではない」と言つたのは以上の事情によるが、しかし、にもかかわらず、時代的に最も近く、最も信頼できる重要文献とされている。従つて以下では、河津千代氏のすぐれたウエルギリウス伝<sup>(4)</sup>、J・ライト・ダフ『ローマ文学史』、コニントン・ネトルシップの上掲書などを参照しつつ、『ロープ古典叢書』版のスエトニウスの「ウエルギリウス伝」を英訳から全訳して、ウエルギリウスの生涯を辿つておこう。

なおその前に、ローマ一千二百余年におよぶ歴史<sup>(5)</sup>の全体像を、まず、次の四つの年で押えておきたい。

紀元前七五三年　ローマ建国（伝承上）。

〃　五〇九年　共和政開始（伝承上）。

〃 二七年 元首政開始。

紀元後四七六年 西ローマ帝国滅亡。

ロムルスによるローマ市建設開始の年は、伝承によれば、紀元前七五三年四月二一日、時にロムルス一八歳、エトルリア系王朝によるローマ王政の開始である。同じく伝承の霞の中の年であるが、紀元前五〇九年はこのエトルリア勢力の追放であり、執政官、元老院、民会をもつローマ共和政開始の年である。紀元前二七年はカエサル（シーザー）の養子オクタウィアヌスによる元首政、実質的には帝政の開始の年である。このように王政から共和政へ、元首政を経て帝政に至り、ゲルマン民族の大移動で滅亡する、これが千二百余年の古代ローマの大きな輪廓である。

ところでウエルギリウスは、紀元前七〇年に生まれ、前一九年に五一歳で没している。右に示した四つの年で見ると、共和政の最末期から元首政への過渡の時代に当る。前一三五年シリー島の奴隸反乱、あるいは前一三三年護民官ティベリウス・グラッスス殺害で始まり、前三〇年のアレクサンドリア陥落、アントニウスとクレオパトラ自殺で終るいわゆる「内乱の一世紀」の激動の時代でもある。

われわれがこの章でとりあげようとしているウエルギリウスの「牧歌」は、後に見るようにスエトニウスは三年で完成したと述べているが、今日の研究では、紀元前四三年（ウエルギリウス二六歳）から、紀元前三七年（ウエルギリウス三二歳）までの六年間にわたっているとされる。「牧歌」成立の背景を知るために、再び、次の四つの年を押えておきたい。

紀元前六〇年 第一回三頭政治。

〃 四四年 カエサル暗殺。

アルカディアアの誕生・ウエルギリウス

〃 四三年 第二回三頭政治。

〃 二七年 元首政開始。

カエサルは第一回三頭政治から一六年後、共和派に暗殺される。全くの偶然ではあるが（偶然と思えぬふしもある）、オクタウィアヌスは第二回三頭政治から一六年目、共和政の第一人者プリンケプスとなることで実質的な帝政を開始する。オクタウィアヌスはカエサルの姉ユリアの娘アティアの子であるから、姪の子供に当る。カエサルは死の一年半前（前四五年九月頃）に書かれた遺言書で彼を養子に指名していたのである。

ウエルギリウスの生涯は、このカエサル家と間接・直接に深い関わりを持つ。従って以下ではスエトニウスの「ウエルギリウス伝」を中心におき、カエサルとの関係や重要な興味あるエピソードなどを補足しつつ、述べていこう。(1)、(2)の数字は原ラテン文の段落である。

(1) プーブリウス・ウエルギリウス・マローはマントウアの人で両親は卑賤の出であった。特に父親は、ある人々の説によれば陶工であったというが、一般には、彼は最初、マギウスなる下級役人の使用人ウイアートルメルケンリウスであったが、のちに勤勉さを買われてその養子となり、<sup>\*</sup>森林地を買い占めたり養蜂したりして、彼の小さな財産を大いに殖やしたと伝えられている。

※マギウスの娘マギア・ポルラ *Magia Polla* と結婚。ウエルギリウスはダンテの『神曲』では、ダンテをとまなつて彼岸の世界を道案内する。ウエルギリウスの母「マギアの名が東方の予言者あるいは魔法師を意味するマグス（女性形マガ）[magus-maga]」の語を憶い起させるものがあるために、中世においては、この世を超越して不思議の世界に参入する詩人と考えられていたウエルギリウスを、一層超越的な詩人と思わしめる効果をもつことに

なつた」(岩波文庫『アエネーイス』下。解説)。

(2) ウェルギリウスは、大グナエウス・ポンペイウスとマルクス・リキニウス・クラッススの第一回目コグニツスルの執政官年の一〇月一五日にマントウアからほど遠からぬアンデースと呼ばれる村パグスで生れた。

※ローマでは紀元前五〇九年より「執政官の暦」が始まり、二人の執政官の名で年を表わした。この年は紀元前七〇年。

(3) ウェルギリウスが母親のお腹にいるとき、彼女は次のような夢を見た。彼女は月桂樹の小枝を生み、枝は大地にふれるや否や根がつき、たちまち成木の大きさになり、さまざま種類の果実や花をいっぱいつけたと。そしてその翌日、近くの土地ルミスに夫と一緒に行く途中で産気づき、わき道の道路わきの溝で子供を生んだ。(4) いい伝えによると、この子供は産声をあげる代りに、生まれたばかりだというのに、すばらしい幸運を約束するかのようなやさしい笑顔を見せたという。

(5) そのほか次のようなよい兆しきもあつた。ポプラの若木がウェルギリウスの生まれ落ちた所からすくすくと育ちはじめ、この地方では子供の誕生にはいつも植えるのであるが、あつという間にすつと以前に植えたポプラと同じ高さにまで生長したのである。そのポプラはこのことから「ウェルギリウスの樹」と呼ばれるようになり、のみならず、妊婦や子供を生んだばかりの婦人たちはこのポプラの下で願いごとをするなど、大いなる敬意をもつて崇拜されたのである。

(6) ウェルギリウスは、彼が生れたときに執政官であつた同じ二人が執政官の年、成人の市民服トリブナをまとうようになる一五歳の誕生日までの少年時代を、クレモナですごした\*。(7) ウェルギリウスの一五歳の誕生日のまさにその日に詩人

のルクレティウスが没している。

※ウエルギリウスが一二歳のとき、子供の教育のために、一家でアンデースからクレモナに転居した(河津)。ウエルギリウス一一歳のとき、前五八年三月から前五九年一月まで、カエサルは両ガリア——アルプスのこちら側のガリアと向こう側のガリア——の総督であり、カエサルのガリアでの輝かしい戦功やブリタニアまでも征服が、ウエルギリウス少年の空想力をいたくかき立てたに違いないこと、ウエルギリウスのカエサル家への崇拜・忠誠はこの頃より始まつていたということは、多くの学者たちの一致した見解であるようだ。

(8)ウエルギリウスは、しかしクレモナからメディオラヌム「ミラノ」へ移り、ほどなくしてメディオラヌムからローマに転居した<sup>※</sup>。彼は背が高く、色浅黒く、田舎者<sup>ルスティカ</sup>といった風貌であつた。体が弱く、たえず胃や喉の痛み、頭痛に悩まされ、しばしば血を吐いた。

※ウエルギリウス一家はクレモナに三年間、一五歳の誕生日を機に、両親は子供たちに更なる高等教育を授けようと、ミラノに移る(マントヴァの土地はそのまま)。ウエルギリウスがミラノで勉強中の前五五年の秋、カエサルは「地の果てはるかなるブリタニア」(「牧歌」一一六六)、謎の国ブリタニアに上陸、元老院は大いに感動し二〇日間もの大感謝祭を催している。カエサルはガリア総督の九年間冬期はポー河流域のガリア、主としてラヴェンナやルツカに腰をすえ、巡回裁判を行つて越冬している。交通の要衝であるクレモナやミラノで勉強中のウエルギリウス少年は、カエサルの輝かしい戦功の噂のみならずカエサルその人を見かけた可能性すらある。ウエルギリウスがミラノを離れローマに出たのは一七歳の半ば頃、つまり紀元前五二年の春の頃(河津)とするなら、同年冬、ガリアでのカエサルの戦功に感謝して再び二〇日に及ぶ大感謝祭がローマで催されたのをウエルギリウ

スは目撃したはずである。

(9)食は細く、ブドウ酒ブワイヌムはほとんど飲めなかつた。ウエルギリウスはとりわけ少年を愛する傾向を持ち、特別のお気に入りには、ケーベスとアレクサンデルで、アレクサンデルのことを彼の「牧歌」の第二歌の中でアレックスと呼んでいる。アレクサンデルはアシニウス・ポリオ\*から与えられた。この二人の寵童はかなりの教養をもち、ケーベスは詩人でもあつた。

※ポリオはアントニウスの腹心の部下、ウエルギリウスの詩才を見ぬき、「牧歌」を書くことを勧めた。おそらく前四五年頃から前四〇年末頃までウエルギリウスの最初の庇護者パトロニウスとなる（河津）。

ウエルギリウスは、また、プロティア・ヒエリアとも親しくつき合つていたとも言われているが、(10)アスコニウス・ペディアヌスは次のように断言している。後年プロティア・ヒエリアが年をとつてからよく言つていたことであるが、ウエルギリウスはワリウスに、私プロティアとつき合うよう言われたが、ウエルギリウスはそれをきつぱりと断つた。(11)そのほか、ウエルギリウスは話しぶりや考え方においても全く控え目であつて、ナポリではいつも「ギリシヤ語で」「お嬢さまパルチニアス」と呼ばれていたし、めつたに行かないけれども、ローマの公衆の前に姿を現わすときは、いつでも彼のあとにぞろぞろとついてくる人たちや、あれがウエルギリウスだと言つて指さす人々をさけて、近くの家にとびこんで隠れてしまうことがよくあつたようである。(12)さらに、アウグストゥス\*が、追放された人々の財産を彼に与えようとしたとき、ウエルギリウスは遠慮して仲々受けとらうとしなかつた。

※前四一年、ウエルギリウスのマントウアの土地が没収されたとき、アウグストゥスつまりオクタウィアヌスに直接かけあい、没収を取り消してもらつたことがあつた。ポリオはオクタウィアヌスと対立するアントニウスの

副官であり、土地没収の取消でオクタウィアヌスの恩も受け、板ばさみとなる（後述）。

(13) ウェルギリウスはおよそ一千万セステルティウスのお金を持っていたが、それは皆、友人たちからの気前のよい贈物であった。彼はマエケーナスの庭園の近く、ローマのエスキリーナエ「ローマ七つの丘の一つ」に一軒の家を持っていたが、普段はカンパニア「ナポリをさす」やシキリアに隠棲セキススしていた。

※ポリオが前四〇年末マケドニア統治のためローマを去ってから、ウェルギリウスはマエケーナスの庇護を受け、ローマのエスキリーナエのマエケーナスの邸宅のすぐそばに一軒の家を建ててもらった。ウェルギリウスは前五二年春ローマに出てきたが、弁護士になることを断念して、前四九年にナポリのエピクロス哲学者シローの許に身を寄せる。前四一年ウェルギリウスのマントウアの土地が没収されかけたときはナポリに居たようである（河津）。

(14) ウェルギリウスが成人になってから、両親が亡くなった\*。父親は以前から盲目になっていた。二人の弟のうち、シローは早逝し、フラックスは成年には達したが若くして死に、(15) ウェルギリウスはダフニスの名でその死を悼んでいる。「牧歌」五―二〇」。学問の中では、医学にもそしてとりわけ数学にも興味をもった。(16) 彼は一回だけ法廷で弁護したが二度としなかった。メリススウスが語っているように、彼は訥弁でまるで無教養な人のようにしか喋れなかったからである。

※ウェルギリウスの母は父よりも長生きし、再婚してワレリウス・ブロークルスを生んだ。再婚した相手のつれ子かともいう（河津）。のちウェルギリウスの養子となる。

(17) ウェルギリウスは、まだ子供であった頃から詩作をはじめ、強盗したとの悪評のため石打ちの刑に処せられたバ



リスターと呼ばれた教師「剣闘士養成学校の師範」のことを歌った次のような二行詩を作っている。

この岩の下にバリストアはおおわれ眠る

旅行く者は昼夜となく安らかにこの道をたどる。

その後、ウエルギリウスは、「選集」<sup>カクシヤク</sup>、「豊饒の神」<sup>アブリア</sup>、「警句」<sup>モウラムマ</sup>、「復讐の女神」<sup>ゲイ</sup>などを書き、一六歳の時には「うみどり」と「蚊」<sup>ツシユス</sup>を書いていいる。(18)「蚊」の筋はこうである。一人の牧人<sup>バスター</sup>が余りの猛暑に疲れ果て、とある木陰で眠り込んでしまう。そこへ一匹の毒蛇がそつとしのび寄る。そのとき沼から一匹の蚊が飛んできて、牧人のこめかみを刺す。牧人はハツとして蚊を殺し、そして蛇も殺す。牧人は蚊の墓を作り、次のような二行詩を刻む。

汝 小さき蚊よ ありがとう 偉大なる牧人はここに今申し出る

汝の命の贈り物の返礼に葬送の儀式をとり行なわんことを。

(19)彼はまた「アエトナ」(シシリアの火山名)を書いた。しかし彼の作かどうか議論のあるところである。その後ほどなく「ローマ史」<sup>レス・ローマナス</sup>を書き初めるが、このテーマは自分には合わぬと考え、「牧歌」<sup>アツコリカ</sup>へと向かう。そこで特にアシニウス・ポリオ、アルフェヌス・ワルス、コルネリウス・ガルスへの讃歌を唱おうとしたのである。というのも、ピリッピ「前四二年一月」の勝利の後、三頭執政官の命令で退役した軍人<sup>ウエテラナス</sup>たちにポー河以北の土地の分配があったとき、ポリオら三人はウエルギリウスを破滅から救ったからである。

(20)そのあとウエルギリウスはマエケーナスを讀えて「農耕詩」<sup>ゲオルギカ</sup>を書く。詩人がまだ無名の時代、ある退役軍人とウエルギリウスの所有する土地のことで争いとなり、暴力ぎたのあげくほとんど殺されそうになったとき、マエケーナスに助けられたのである。

※紀元年三六年から前二九年秋まで七年間で完成（河津、二八頁）。

(2) そして遂に、ウエルギリウスは変化に富み複雑なテーマをもつ「アエネーイス」にとりかかる「前二九年」。これはホメロスの二つの詩「イリアース」と「オデッセイ」を手本としつつ、ギリシャやラテンの人物や事件をも扱ったものであり、同時に、これが詩人の特別な目的でもあったが、ローマの都とアウグストゥスの祖先の物語を含むものであった。

(22) ウエルギリウスが「農耕詩」を書いているとき、彼は毎日午前中に膨大な数の詩句を作つて書きとらせておき、それからその日一日中をかけて、その中からほんの数句を残すまでに厳選するのが常だったという。自分でも冗談まじりに、「私は雌熊のやり方をまねて詩を作る、ゆつくり舐めてものにするのだ」と述べている。

(23) 「アエネーイス」の場合、まず散文で全体の下書きをし、それを一二巻に分けた。それから順序は全く気にしないで、思い浮かぶままにある部分を取りあげ、韻文で一場面、一場面とつみ重ねていった。

(24) しかも彼は自分の思考の流れをほとんどチェックせず、ある事柄の部分を未完のまま放置しておく。そして全く軽い言葉でそれ以外のものを支えておき、いわば彼が冗談まじりによくいつていたように、その軽い言葉はつつつかい棒のように置かれて、しつかりした柱が到着するまでその全構造を支えているのである。

(25) ウエルギリウスは「牧歌」を三年「最近の研究では六年」で完成した。「農耕詩」は七年、「アエネーイス」は二年である。

(26) 「牧歌」が初めて世に現われたときの成功ぶりは、「牧歌」が劇場で俳優によって何度も何度も朗読されたこと\*でわかる。

※ガルスの情人キュテーリスが、おそらく前三九年に「牧歌」の第六歌を舞台で朗読し、作者のウエルギリウスは一夜にして一流の詩人として認められたという（河津、二五頁）。

(27) アウグストゥスがアクチウムの戦い「前三一年九月二日」に勝つて帰国し、アテルラ「カンパニアの古い町」で喉の治療のために滞在していたとき、ウエルギリウスは「農耕詩」をアウグストゥスのために四日間ぶつ続けで朗読し、詩人の声の調子が悪くなって朗読できなくなると、マエケーナがいつでも代わって朗読してやった。(28) ところでウエルギリウス自身の詩の朗読ぶりは、美<sup>スチュータチ</sup>声で、すばらしく効果的で、事実、(29) セネカは次のように語っている。詩人のユリウス・モンタヌスはよくこう公言していたものだ。もし私モンタヌスがウエルギリウスの声、いいまわし、ドラマティックな表現力をもつていない限り、ウエルギリウスの作品を盗んでも仕方ないだろう。というのも、同じ詩でもウエルギリウスが読むとすばらしく聞えるのに、他の人が読むと平板で単調なものになってしまうからと。

(30) 「アエネーイス」が書き初められるや、その評判は大変なもので、セクトゥス・プロペルティウスは次のように宣言してはばからなかった「前二六年頃」。

控えよ、ローマの、ギリシャの詩人たちよ、

「イリアース」よりも偉大な何物かが生まれつつある。

(31) アウグストゥスは実際、——彼はカンタブリアの戦役「ヒスパニア戦役のこと、前二七〜二五年」への遠征の途中であったが——、半ば懇願の、そして冗談ではあるが、半ば脅迫の手紙で、ウエルギリウスに、「『アエネーイス』の中から何か」、アウグストゥス自身の言葉を使えば、「何か自分を喜ばすような、詩の最初の草稿<sup>イボグラフイ</sup>かその一部<sup>コロン</sup>を」送ってほしいと頼んだ。

アルカディアの誕生・ウエルギリウス

(32)しかし、ずっと後、素材が形となつて初めて、ウエルギリウスは第二、第四、第六巻の三巻全部をアウグストゥスに朗読したのであつた。第六巻は、その朗読会に出ている「アウグストゥスの姉」オクタウィアに深い感銘を与えた。ウエルギリウスがオクタウィアの息子「小マルケルス」を歌つた部分に読み至り、「汝は大マルケルスとなるであろう」と言つたとき、(33)オクタウィアは氣を失つてしまい、やつとのことで蘇生したと伝えられている。

※アエネーイスは地下界のエーリュシウム(楽国)で父の幻にあり、ローマの運命を教えられる。この場面は眞の武人大マルケルスと並んで、「容姿すぐれた若者」の「面持ち悲しげにまなこを地に伏せ」つつ行く少年、小マルケルスが、眞の武勇と信義もて、やがて大マルケルスと同じく「眞に一人のマルケルスとなるう」、という場面である。小マルケルスは紀元前三二年、一九歳の若さで死ぬ。この朗読は小マルケルスが死の直後のことか。『アエネーイス』(六一八八四)。コニントン、XXVI頁参照。

ウエルギリウスはいろんな人たちに朗読して聞かせたが、大勢の前では決して朗読しなかつた。というのも朗読するのは大抵自分が疑問を持つてゐる部分であつて、よきアドヴァイスを得ようと思つたからである。(34)ウエルギリウスの筆記係で解放奴隷のエロースは、老年になつてから、よく次のように語つてゐた。ウエルギリウスは朗読中に、その場で、半行分の詩句二つを作りあげる。たとえば「アエオルスの子ミーセーヌス」という語句だけがある。するとウエルギリウスは「鼓舞する技倆はならびなく」をそれに加える。さらに「ラッパを吹いて勇士らを」なる句に「軍神マルスもそれを聞いてふるい立つほど腕のある」を結びつける。それはインスピレーションのようにほとぼしり出て、直ちに私エロースにそれら二つの半行語句を書きとらせて草稿に加えさせると。

※『アエネーイス』(六一一六三) 岩波版『アエネーイス』上の361頁参照。

(35)五二歳のとき、「アエネーイス」に最後の仕上げを加えるべく、ギリシャとアジアに行こうと決心した。自分の詩に更なる彫琢を加えるという仕事にのみ丸々三年をかけ、そのあとの全余生を哲学に捧げようと決めたのである。彼は旅にのぼった。そしてアテネでアウグストゥスに逢う。アウグストゥスは丁度オリエントからローマに戻る途中であつた。ウエルギリウスは彼に別れを告げるどころか一諸に帰国しようとするのである。しかも、アテネの隣り町メガラに向かう途次、酷暑の太陽に当つて熱病でたおれてしまう。体の不調を押して旅を続けたため、ブルンディシウムに着いたとき病状は極めて悪化し、グナエウス・センチウスとクイントゥス・ルクレティウスの執政官の年、一〇月の一日の前一日にそこで死んだ。

※紀元前一九年九月二一日に当る。二、四、六、九、一一が小の月(三〇日)、日数の計算は起点、終点の日を数える。なおヘルマン・プロツホ『ウエルギリウスの死』(川村二郎訳 集英社 一九七七)も参照。

(36)ウエルギリウスの骨はナポリに運ばれ、市街から二マイルほど離れたプテオリ―街道のほとりに埋葬された。墓石にはウエルギリウス自身の手になる次の二行詩…

マントウアわれを生み、カラブリアわが命を奪ひ、  
パルテノペー今やわれを納めぬ。

われは歌いぬ、牧場を、農場を、  
武將たちを。

※カラブリア地方の東海に彼の客死したブルンディシウムの港がある。パルテノペーはナポリの古名。牧場、農場、武將は彼の三作「牧歌」、「農耕詩」、「アエネーイス」を指す(河津、三二頁)。

(37)ウエルギリウスは異父弟のワレリウス・ブロークルスを養子に指名して財産の $\frac{1}{2}$ を、アウグトゥスに $\frac{1}{4}$ を、マエケーナスに $\frac{1}{4}$ を、残り「 $\frac{1}{6}$ 」をルキウス・ウァリウスとプロティウス・トゥツカに贈つた。このあとの二人はウエル

ギリウスの没後、アウグストゥスの命令で「アエネーイス」を校訂したが、(38)このことについてはカルタゴのスルピキウスに次のような詩がある。

ウエルギリウスはこの詩を即座に焼き亡ぼせという。

フィリギア「トロイア」の名高き人を歌いし歌を、

ウアリウスとトゥツカは拒み、また偉大なるカエサルあなたも

彼らに与し、ラティウムの物語は生き残った。

薄幸のペルガモン「トロイア」は二度の炎に焼かれ、

トロイアは二度目の炎によってほとんど灰燼に帰したのに。

(39)ウエルギリウスはイタリアを離れる前にウアリウスと打ち合せ、もし自分に何かよくない事が起つたら、友人であるウアリウスに「アエネーイス」を焼きすててほしいと頼む。ウアリウスは、自分にはとてもそんなことはできないときっぱりと断わったことがあつた。そこでウエルギリウスは、今、死の床の中にあつて、自分でその詩を焼きすてようと何度も文箆を持つてきてくれと頼むが、誰一人持つていかない。ウエルギリウスも、もうそれ以上そのことを要求しない。

(40)しかし、ウエルギリウスは、自分が世にだすつもりのないものは何も出版しないという条件をつけて、ウアリウスとトゥツカに作品を託す。(41)しかしながら、アウグストゥスの要請で、ウアリウスは未完の数行も全くそのままにして、二、三の小さな訂正を加えただけで、「アエネーイス」を出版する。未完の数行は、後になって、何度も完成させようと試みられたが、ウエルギリウスの半行分の詩句はほとんど全て、感覚的にも意味的にも完璧であるという困

難性があつて、(42)唯一の例外、「あの子をあなたはトロイアが…」(Quem tibi iam Troia…)を<sup>\*</sup>除いて、結局は不可能であつた。

※「落ちたとき」と続けるつもりであつたろうという点で全ての人が一致しているようである(『アエネーイス』岩波版三―三四〇)。

(43)文法家のニスウスは、ウアリウスが二つの巻の順序を変え、当時第二巻であつたものを第三巻とし、さらに第一巻の次のような行(訳は岩波版による)を削除してしまつた、と古老が口にしていたことを伝えている。

かつてあえかの蘆笛で、わたしの歌をうたいつつ、

ふかい森から立ち出でて、近いまわりの田や畑に、

みのりのゆたかを乞いねがう、農耕人の満足を、

みたすように強いて来た——(これこそまさに農人が、

よろこぶ歌作でこそあつた)——私であつたがさて今は、<sup>\*</sup>

※この部分は「作者<sup>ウエルギリウス</sup>の定稿以前の試作のものと思われる」(『アエネーイス』岩波版上の一〇頁)。

(43)別に不思議なことではないけれども、ホメロスを誹謗する人はゆめいまいが、ウエルギリウスを誹謗する人にはことかかなかつた。『牧歌』が現われたとき、ヌミトリウスなる者が「反<sup>アンティ・アリコク</sup>牧歌」を書いた。たつた二つの詩からなり、全くつまらないパロディーであつて、その最初の詩は次のように始まつている。

ティーテュルスよ、暖かい寛衣<sup>トイガ</sup>があるなら、なぜ「ブナの下陰におおわれる」<sup>\*</sup>?

※「牧歌」第一歌の冒頭「ブナの下陰におおわれる」なら、暖かいトイガもいらなだらうにとの駄洒落。

アルカディアの誕生・ウエルギリウス

第二の詩は

やあ、ダモエタスよ、Cuium pecus? (誰の羊たち?) はラテン語かね。

いや、アエゴン語だ、わが田舎ではそんな風にいふんだ。

※「牧歌」第三歌の冒頭。「誰の」にcuiumを使うのは古い法律用語。アエゴンはこの羊の持ち主。ウエルギリウスの詩が時代遅れとからかっている(コニントン、四三頁)。

(44)他の人は、ウエルギリウスが『農耕詩』の「裸で耕せ、裸で蒔け」(二―二九九)を朗読したとき、「風邪を引かないかな」という句を付け加えた。またカルウイリウス・ピクトルによる「アエネーイス」批判の書、『アエネーイスを答つ』なる書物もある。マルクス・ウィプサニウスは、誇大でもなく・考えぬかれた平易さもなく・日常語で明晰さに欠ける・新しい気取った言葉遣いの創始者マエケーナスのマエケーナスの子「二番煎じ者」と呼んだ。

※マエケーナスの詩文についてはスエトニウス『ローマ皇帝伝』二―八六参照。

ヘレンニウスはウエルギリウスの欠点「スタイルや表現の欠点」だけを集め、ペレルリウス・ファウスタはウエルギリウスの盗品「他書からの引用」だけを集めて選集を作った。

(45)そのほか、クウイントゥス・オクタウィウス・アウイトゥスの『模倣』と名づけられた八巻本にはウエルギリウスが借りて来た詩句とその原詩句とを収めてある。

(46)アスコニウス・ペディアヌスは彼の著書『ウエルギリウス批判者への批判』の中で、ウエルギリウスに罪はほとんどないと述べ、ウエルギリウスが大いにホメロスから借りて来たとの告発やその歴史に筆をついやし、次のように言っている。ウエルギリウスはそういつた告発にあらうことに、「私を批判する人たちも同じ盗みをしてみたらいいのに。



そうすれば、ヘルクレスから棍棒を盗む方が、ホメロスから一行を盗むよりも、はるかに易しいと解るだろうに」との言葉で応えた。しかしながら、アスコニウスはまた次のように言つてもいるのである。ウエルギリウスは、粗搜しの批判者たちを満足させるようなあらゆるものを取り除くために、引退するつもりであつたと。

## (I) 「牧歌」の時代

「牧歌」*Bucolica*は、ウエルギリウスが讚美して止まない栄光のカエサル五六歳の暗殺の翌年、カエサルにとつて姪の子供であり、かつカエサルの遺言でその養子となつたオクタウィウス（のちオクタウィアヌス）一九歳の登場期、エルンスト・マイヤー『ローマ人の国家と国家思想』によれば、「カエサルの死後、数週間にして、権力をめぐる例の流血劇が始まつた。またしても時代は流血、荒廃とくに凄じい内戦の一四年へ進んだ」時代に書き始められた。「牧歌」の完成するのが紀元前三十七年春のことであるから、以下では「牧歌」の時代を知るべく、紀元前四四年三月一五日のカエサル暗殺からオクタウィアヌスの権力の確立するすこし前までの、ローマ共和政最末期の政治状況を辿つておきたい。

このいわゆる「内戦の一四年」間の政治状況は一見きわめて複雑な様相を呈するが、次のようにいくつかの段階に分けて考えるとわかり易い。

① 第一段階、原型。前四四年三月一五日（三月二〇日）。カエサル暗殺直後の一週間足らずの間に見られた、故カトー、キケロ、マルクス・ブルトゥス（カエサルが殺されたとき、「お前もかブルトゥス」といったという、ブルトゥスであ

る(らいわゆる貴頭派オンチイラテリスと故カエサル、アントニウらいわゆる民衆派ボクラーレリスとの対立と連合を原型としてみる。貴頭派 *optimates* は *optimus* 「最良の」、の関連語で、伝統を尊重し、貴族 *nobilitas* 「高貴・卓越の意」の単独支配を頑強に固執する貴族たちのこと、いわば伝統派である。それに対し民衆派 *populares* とは *populus* 「民衆」国民」の関連語で、一般国民の意思を尊重し、民衆の政治的権利を拡張し、その物質的境遇を改養しようとする貴族たちのことである。この対立を基本構造と見る。

②第二段階、貴頭派の勝利。紀元前四四年四月から四三年一〇月のいわゆる第二回三頭政治(アントニウス、レピドゥス、オクタウィアヌス)成立の直前までの一年半ほどの間。前四四年四月中旬クレオパトラの帰国、入れちがいにローマ入りするオクタウィアヌス(四月末)、オクタウィアヌスとアントニウスのカピトリウムの和解(八月一日頃)、キケロとアントニウスの対立激化。オクタウィアヌスがカエサル暗殺者の貴頭派と結んでアントニウスと戦うムテナの戦い(前四三年四月)、アントニウスの大敗、貴頭派の勝利。キケロの支援で一九歳のオクタウィアヌスが何と執政官コンソルにつき(四三年八月一九日)、オクタウィアヌスは完全に貴頭派にとりこまれてしまふかに見えた。

③第三段階、三頭政治期トリウムクワイラトウス。前四三年一〇月三頭政治の成立から前三九年夏のミセヌムの協定前までの四年間弱の時期。ローマ共和政の実権は「国家再建のための三人委員」*triumviri rei publicae constituendae* の手に完全に渡り、アントニウス、オクタウィアヌスは連合して紀元前四二年一〇月、マケドニアのピリッピにて、M・ブルトウス、カッシウスの軍を破る。この敗戦で故カエサルの暗殺者にして貴頭派はほぼ滅亡する。ピリッピの戦いのあと、兵士たちへの土地分配をめぐるって、イタリアは大混乱し、ペルージャの戦い(前四〇年二月)、ブルンディシウムの協定(前四〇年一〇月)をひきおこす。

④第四段階、四頭体制期。前三九年夏のミセヌムの和平「アテオリー（ナポリ）の北、ミセヌム岬の沖に停泊するポンペイウスの艦上で会見した」から前三六年九月のナウロクスの海戦までの三年間ほどの時期。海上の支配権を握り、イタリアの食糧補給路を左右する冒険者・大ポンペイウスの子供セクストゥス・ポンペイウスが三頭政治に介入、いわば四頭体制を形成する。この四人の中で一体誰が最後まで生き残るのか、全く不明の時期である。

⑤第五段階、二頭体制期。前三六年九月三日のナウロクスの海戦で四頭体制中のポンペイウスは大敗し、レピドゥスは三人委員の権限を奪われ、オクタウィアヌスとアントニウスのみが残り、いわば二頭体制となる。前三一年九月のアクチウムの海戦でアントニウス・クレオパトラ連合艦隊の大敗北、アントニウスの自殺（前三〇年八月一日）、クレオパトラの自殺（前三〇年八月三〇日）を経て、オクタウィアヌスがただ一人屹立する。カエサル暗殺から十四年目、内戦の終焉である。

ところでウェルギリウスの、「牧歌」全一〇歌は、今日の研究では次の表に見るように成立したとされる。いま、主として河津千代氏の成立年代推定により、作られた順に並びかえてみる。

前四三年 第二歌（夏）、

前四二年 第三・七（春）、第五（夏）、

前四一年 第九（春）、第一（秋）、

前四〇年 第四（年末）、

前三九年 第六（初頭）、第八（夏）、

前三七年 第十（初頭）。

アルカダイアの誕生・ウェルギリウス

つまり「牧歌」は紀元前四三年夏、ウエルギリウス二六歳の時から、前三七年初頭、ウエルギリウス三二歳の時までの丸六年間の間に書かれているから、上記の五つの段階の時代区分によれば、第二段階から第四段階、貴顕派のつかの間の勝利から完全な没落へ、そして四頭が覇権を争い、一体誰の手に最高権力が落ちるか全く予断を許さない、混乱を極める時代に完成している。

ウエルギリウスは共和政最末期の激しい政争には全くかわらない非政治的能度を貫くが、外なる政治の荒々しい波は彼の詩と生活に大きな影響を与える。ウエルギリウスは「アルカディアア」という理想の景観を設定することで悪しき政治を鋭く告発する。彼は主としてナポリ、まれにローマ、シキリアに住みつつ、当時の政治を「アルカディアア」への「野蛮人」の侵入として批判する。土地没収というウエルギリウスに大きな衝撃を与えた注目すべき事件をも含めて、内戦が当時の市民（農民）にいかなる影響を与えたのか、いったいいかなる社会不安を醸成したのか、このことを知るためには、上に述べた第三、第四段階のローマ共和政の断末魔の政治史をもうすこし詳しく辿っておく必要がある。依拠した書物は、叙述の関係から最小限の表記にとどめた（巻末の諸注を参照）。

第一段階（原型）の五日間は、ローマ共和政における政治家たちの愛と憎、敵と友の行動様式と、民衆・兵士の極めて情動的な扇動され易い性格とを鮮やかに映し出しているの、やや詳しくこれを辿ってみる。

カエサルが暗殺された（前四四年三月一五日）とき、元老院議員はブルタルコスによれば「恐怖に震えあがり、逃げ出すこともせず、カエサルを助けようとしなかった。いや、それどころか、声を出す勇氣さえなかった」（カエサル、六六）。これはローマ共和政の象徴、「元老院の権威」（*アウクトリタス・セネトウス*）（*プライケン*）の完全なる失墜を示していた。カエサルの腹心の部下、アントニウスとレピドゥスは恐れて身を隠し、暗殺者 *M・ブルトウス* や *カッシウス* 一味だけが「意気

揚々として」カピトリウムの丘に集まった。彼らに混ざって一緒にいつた者たちも、のち、アントニウスと小カエサル（アウグストゥス）の手で肅清されることになる。

翌一六日、マルクス・ブルトゥスが中央広場において来て演説したとき、民衆たちは一方ではカエサルへの哀悼と他方ではブルトゥスへの畏敬という分裂した感情を表明した（アルタルコス、カエサル、六七）。これは事件の全貌を理解できず、事と次第によつてはどちらに傾くか知れない民衆の不安定な感情をよく示すものであった。この日、アントニウスはオプス神殿からとり出したカエサルの財産と公金で自分の負債四千万セステルティウスを払ってしまう（キケロ、ピイリッピカ、一）。後、オクタウィアヌスに請求され、ごまかしの一手。

翌一七日、執政官のアントニウスは、カエサル亡きあと同僚執政官となつたコルネリウス・ドラベルラと共に、元老院を召集する。アントニウスはカエサルの復讐をいう部下たちを黙らせ、他方キケロも一切を水に流して大赦令を出すべしと提案する。かくてM・ブルトゥスらはカピトリウムの丘をおり、その夜、アントニウスはカッシウスを、レピドゥスはM・ブルトゥスを宴会に招き和解する。

三月一八日早朝、元老院会議がひき続き開かれ、内乱を未然に防いだとの功績でアントニウスへの感謝を表明し、ブルトゥスらに属州を配分する。カッシウスにアフリカ、トレポニウスにアジア、デキムス・ブルトゥスにガリア・キサルピナを、マルクス・ブルトゥスにクレタ島を与え、かつ、カエサルを神として崇めること、カエサルの法は一切変更しないことを決議した。なおD・ブルトゥスがガリア・キサルピアつまりアルプスのこちら側のガリアを属州として与えられたことで、のちポー川の沿岸にあるウエルギリウスの故郷は大きな不幸にみまわれる。

翌一九日にはカエサルの遺言状（前四五年九月頃書かれた）や葬儀の手配などが論議された。カッシウスは事態の

急変を予感して、アントニウスが遺言状を読むことに反対したが、結局、アントニウスによって遺言状が公開された。ローマの市民たちは、市民一人一人に三〇〇セステルティウスのお金とティベリス河対岸の「カエサル庭園」が公共に寄付されたことを知り、カエサルの恩義に改めて深く感動した。カエサル庭園の別荘には紀元前四六年夏からエジプトの女王クレトパトラがカエサルとの子供カエサリオンらと共に住んでいるのである（女王は四四年四月中旬子供をつれてエジプトに戻ることになる）。

二〇日はカエサル国葬の日である。この日事態は急変する。プルタルコスが伝える「プルトゥス伝」によればおおよそ次のようになる。カエサルの遺体が中央広場に運びこまれ、アントニウスがカエサルの徳を讃<sup>た</sup>える追悼の辞を述べその偉業を称賛する。アントニウスは人々がおのれの演説に感動する気配を感じとるや、突然激しい語調に転じ、血に染まったカエサルの衣裳をひろげ、カエサルが何箇所突きさされたかその創あとを見せたのである。人々の悲しみと怒りは爆発し、暗殺者どもを打ち殺せとの絶叫がひびき渡る。広場は一瞬のうちに混乱におちいる。

このようなカエサル没後の五日間の政局の動きは、以後ほぼ二年間、前四二年一〇月のピリッピの戦い以前までの状況をいわば圧縮した形で示している。貴頭派と民衆派との対立を基本軸としながらも、なお柔軟なというか無原則的な同盟が結ばれ、そしてまた直ちに激しい敵対行動に転化し、民衆もそれにまき込まれていくという目まぐるしい動きである。第二段階、故カエサルの後継者ガイウス・オクタウィウス（正式にオクタウィアヌスと名のり養子たることを認められるのは前四三年八月一九日のこと）が、前四四年四月末ローマに現われ、故カエサルの復讐を誓う強硬派でありながら、カエサル暗殺の貴頭派と結ぶことによつて事態はさらに複雑となる。

第二段階でオクタウィアヌスは自己の真意を隠して貴頭派のキケロの支援を得、故カエサルの遺産を管理している

執政官のアントニウスに返済を求めるが、カエサル第一の部下、歴戦の勇士にして三八歳のアントニウスはこの一九歳の若者を完全に見下し、「あれは公金だ」、「使ってしまった」、「相続が法的に認められていない」などと言い、返そうとしない（キケロ、ピイリッピカ、一の導<sup>イントロダクション</sup>入）。前四四年八月一日頃、故カエサルの部下<sup>サブアルターニス</sup>の兵たちの斡旋でカピトリウム神殿で何とか和解するが（セイム、一一八頁）、前四四年九月二日からキケロのアントニウス攻撃の演説（前四三年四月二日まで一四回に及ぶいわゆピイリッピカ、演説）、それに対してアントニウスが反撃を加え、貴顕派（キケロ、オクタウィアヌス）と民衆派（アントニウス）の激しい対立となり、翌年前四三年四月一五日、二一日の二度にわたるいわゆるムティナの戦いに至る。その戦いで貴顕派は勝利し、キケロは「新しい軍団がこの国を解放しつつある」（ピイリッピカ、二二）と期待し、五〇日間もの感謝祭を決定する。

このムティナの戦いで注目すべきは、「兵士たちの残酷な無言の剣さばきは、新兵たちをふるえ上らせた。大虐殺はすさまじいものがあつた」ことである（セイム、一七四頁）。ローマ軍の軍律の厳しき、その怒ろしい戦鬪力は小都市国家ローマを地中海全域をおおう巨大な国家にしたてあげたが、今やこの世界に冠たる軍勢力が、内部へ、市民同志の殺戮へとその凄じい破壊力を向けつつあつた。ムティナの戦いは、以後一種職業的軍人による内戦の惨たる殺戮を予告する戦いでもあつた。

他方オクタウィアヌスについていえば、紀元前四三年八月一九日、キケロの後援（キケロ伝 四六）とオクタウィアヌス自身の軍勢力による威嚇（アウグストゥス伝 二六）で、一九歳と一ヶ月の若者が共和国の政治の頂点執政官<sup>コンソル</sup>に就き、正式に故カエサルの養子たることを認められ、オクタウィアヌスと改名する。通常、執政官には四三歳ぐらいで就く。「法に反した」（キケロ伝 五三）異例中の異例である。しかもオクタウィアヌスは執政官に就くや直ちに

特別法廷を設け、カエサル暗殺者を全員有罪とする。同僚が同僚を告発し、群衆は罪人の家を略奪し、元老院は死刑を宣告し、ローマは今や血なまぐさい合法的殺人の場に一変する。この端倪すべからざる若者は、ここに至つてその凄じい本性を明らかにする。

のみならず、この若者は、紀元前四三年一〇月、突如、貴顕派をふりすて、民衆派のアントニウス、レピドゥスの本拠地ポノニアにのりこみ、いわゆる第二次三頭政治を成立させる。この会議はアントニウスの主導で進められ、オクタウィアヌスは執政官をおろされ、S・ポンペイウスの占領している島（シキリア、サルディニア、コルシカ）を与えられ、しかも一時期「父」とも呼んで同盟を結んでいたキケロの肅清にも同意させられる。のみならず、兵士たちは「結婚によつて友情を堅めよ」（アントニウス伝 二〇）と迫り、オクタウィアヌスはアントニウスの妻フルウィアの娘クラウディアを娶ることになる。

三頭はローマに入り、この私的な三頭体制を「国家再建のための三人委員」として、前四三年一月二七日民会で正式に承認させ、それぞれの政敵を抹殺する合法的な「殺人の交換」（アントニウス伝 二〇）が断行される。キケロも含めて三〇〇人の元老院議員と二千人の騎士が処刑され、この残酷を極めた復讐劇でローマ人の名誉と友情はあとかたもなく消滅してしまつたという。この年つまり前四三年夏、ムティナの戦いのあと、ローマの復讐劇の前、ウェルギリウスはおそらくナポリに在つて「牧歌」の第二歌を書く。全十歌のうち一番最初に書かれたものが、この第二歌とされている。羊飼いのコリユドンが美少年のアレクシスを想つて歌う恋の歌である。ウェルギリウスの「アルカディア」は血なまぐさいローマとは対照的に安らかな平和に満ちている。

紀元前四二年一月一日、レピドゥスとプランクスが執政官となり、故カエサルの法の維持を誓い、カエサルを国家



の神々の列に加える。東方に逃れた暗殺の主謀者たち、カッシウスとM・ブルトゥスを討つべく、アントニウスとオクタウィアヌスは二八軍団（約一二万）を動員する。紀元前四二年一〇月二三日ピリッピの第一次会戦でカッシウスが自尽し、三週間後の第二次会戦でブルトゥスも自殺し、これによってカエサルの暗殺者たち、いわゆる貴顕派はほぼ完全に消滅する。このピリッピの勝利の結果、アントニウスは東方の全属州から税を取りたてて兵士たちへの給与を作り出し、オクタウィアヌスはイタリアに戻って二八軍団の生き残りの兵士たちに土地を分配するという困難な仕事を押しつけられる。この年、つまり紀元前四二年の春と夏の間、ピリッピの戦いの前に、ウェルギリウスは「牧歌」の第三歌、第七歌、第五歌を作る。第五歌はダブニスつまりカエサルの神格化が見られるが、三つの歌はいずれも歌合戦に興じる牧人たちのおおらかな生活が歌われている。

紀元前四一年はルキウス・アントニウスとP・セルウィリウスの執政官の年であるが、実権はルキウスの兄であり、三頭政治のマルクス・アントニウスの妻フルウィアが握り、ルキウスは彼女の助手の如く、フルウィアの意思を無視しては元老院も市民も何事も決定できない。そこにオクタウィアヌスが兵士への土地配分という骨の折れる仕事をもつてピリッピから帰還する（ディオ、四八）。ところで一軍団はふつう四二〇〇人の歩兵、三〇〇人の騎兵より成る。従つてピリッピで戦つた二八軍団は一二万六千人となるが、戦いが終わったときは二〇軍団約九万人に減少し、このうち退役して土地の配分を望んだ者は、古くは一七万人、あるいは一一万人、今日の研究ではおよそ五万人ほどと推定されている。<sup>(10)</sup> 兵士たちの兵役・軍務からの休暇を *otium* と<sup>オティウム</sup> いった。 *otium* は休暇、自由、ことによると死ぬかもしれないような強制的な仕事からの解放を意味する軍用語であり、いま兵士たちはこのオティウム（閑暇、安らぎという意味）を欲していた。オクタウィアヌスは一八の都市を指定してこの五万人ほどの兵士に土地を配分しようとする

る。土地配分はマリウスやカエサルのとつてきた伝統的方法ではあったが、今や配分のための新しい土地もなく、買上げるための資金もないアントニウスとオクタウィアヌスは、ピリッピ戦直後の協定によつて、土地を没収して兵士たちに配分するという強硬手段を採用する。かくてカエサル暗殺の主謀者の一人デキムス・ブルトゥスの属州であつた「ガリア・キサルピナ」つまりアルプスのこちら側のガリア（ポー河流域のウェルギリウスの故郷マントウアを含む地域）がまずその対象となる。

土地の没収とは都市の城壁から測つて周囲三マイル、約四・五<sup>キ</sup>の線の外側の土地に住む者は奴隸や付属品など資産の全てをそっくりそのまま退役兵士に引き渡すこと、つまり土地所有者は身一つになつてその日から住みなれた家と共に一切を失うことを意味した。但し次節の「牧歌」第九歌でみるように、その使用人となつてその地に止まることもあつた。ルキウスとフルウィアは土地没収が始まると、執政官の特権をかさにきて、自分の兵士たちにも土地を配分せよと迫る。しかし土地所有者たちの激しい怒りが配分の責任者オクタウィアヌスに向けられるのを見ると、今度は土地所有者たちに加担してオクタウィアヌスを妨害する。

土地所有者たちは老いも若きも女性も子供も大挙してローマに上り、中央広場や神殿に集まり、何も悪いことをしていないのに土地から追い出されたと泣き訴える。ローマ市民たちも彼らに同情してもらい泣きする。他方、兵士たちは約束の土地配分が順調に行われぬことに憤慨し、ここに土地所有者と兵士との激しい対立が生じ、殺害、投石など内乱の様相さえ帯びる。町や地方の有力者は今や武装して自衛策をこうじる。兵士たちもローマに上り、カピトリウム神殿にて約束の実行を迫り、ルキウスとフルウィアの行動を協定違反として激しく非難する。土地所有者たちは土地没収は全イタリアの都市が共同して負担すべきことをいい、かくてオクタウィアヌスは元老院にて没収の軽減と

妥協を声明し、カンパニア地方を除いて全イタリアをその対象とする（兵士たちはピリッピ戦の始まる前にどこの土地が欲しいか希望を出していたようである）。と共に、神殿の財産を借用して兵士たちにお金を渡し、なだめる（アビアン、五）。兵士たちは土地配分を妨害するルキウスとフルウィアに怒りを向ける。

紀元前四一年、土地没収が始まったとき、ウエルギリウスはナポリにいた。いま河律千代氏の研究（『牧歌・農耕詩』二二―二五頁）に従ってこの間の事情を述べると、およそ次のようになる。ウエルギリウスの故郷マントウア（のアンデース）は初め土地没収の対象外であったが、隣りの市クレモナで没収・割当が行われているうちに土地が足りなくなり、新たに没収の対象に加えられる。土地収容委員のウァールスは規定に従ってマントウア市壁から周囲三マイルの線の外側の土地を没収して退役兵に配分した。その中にウエルギリウスの一族の住むアンデース村の家と土地があった。しかしマントウアは市の三方を沼沢地に囲まれた特殊な地形であつて、市壁から三マイル以内はほとんどが沼沢地となる。従つてマントウアの場合には沼沢地の外側の水際を起点として三マイルを測るべきであつた。

ウエルギリウスはこのとき二八歳、土地没収の知らせを聞くと直ちに実家に戻り、ウァールスに土地返還を要求するが、彼は規定をたてに取り合わない。たまたまウエルギリウスの友人であるガルスが徴税担当の行政官としてこの地にあり、土地測量の不当を指摘してやり直すようにウァールスに要求するが、彼はこれも受けつけない。かくてウエルギリウスは最後の手段として、多くの土地所有者たちと同じようにローマに上り、ガルスの紹介でオクタウィアヌスと直接会見し、マントウアの特殊事情を説明してオクタウィアヌスから正式な土地返還の勅令を得たのである。つまりウエルギリウスは没収法の変更を求める市民的抵抗 *civil disobedience* を敢行したのである。ウァールスはいたく親切になり、測量をやり直してウエルギリウスの農場と同じ条件にあつた全ての土地の没収を取り消し、配分をやり

直した。ウェルギリウスにとって、これは二重の意味で全くの僥倖となる。まず土地が返還された。さらにすこし後になると、ウェルギリウスはオクタウィアヌスの知遇を得ることになるのである。多くの土地所有者たちはオクタウィアヌスに敵対する海の冒険者セクストゥス・ポンペイウスの陣営に走ってその庇護を受けたのである。この没収の年、紀元前四一年にウェルギリウスは土地没収を主題とした二つの詩第九歌と第一歌を書く。三頭政治家の一人、オクタウィアヌスの土地政策に対する痛烈な、しかし巧妙を極めた婉曲的な批判である。ウェルギリウスは平和な理想郷アルカディアに突如侵入する野蛮人との比喩で、この自己の切実な体験をより普遍化して提示する。

ところでオクタウィアヌスの妻クラウディアはアントニウスの妻フルウィアの娘であるから、オクタウィアヌスにとってフルウィアは義母に当る。今や土地配分を契機に両者は完全に対立する。オクタウィアヌスは妻を離縁して対決の決意を示せば、ルキウスもフルウィアも引きさがるところか共和派・貴頭派に与<sup>よ</sup>してオクタウィアヌスを非難する。オクタウィアヌスの兵士たちは、一時は内戦を回避しようと努力するが、結局武力でもってルキウスとフルウィアを排除しようと、全イタリアに指示を飛ばし、つてを求めて戦いのためのお金を集める。ルキウスとフルウィアは元老院の後援（ルキウスは執政官である故）のみならず、共和派の海軍力（S・ポンペイウスとアエノバルプス）、兄アントニウスの腹心の部下でアルプスのこちら側のガリアを守るポリオの軍、アルプスの向こう側のガリアの総督カレヌスとウェンティディウスの巨大な軍事力をたのみに、必勝を確信してペルージャに立てこもる。

紀元前四〇年、ポリオとカルウィヌスの執政官の年の二月末、ルキウス側の不和と不統一に助けられて、長い籠城戦・包囲戦の末、ルキウスらは飢餓に迫られて投降する。フルウィアは東方に逃れ、ルキウスはペルージャの市民に殺され、ペルージャの市も放火で全滅する。オクタウィアヌスはローマに帰還し、騎士・元老院議員を三百人、三月

一五日（カエサル暗殺の日）神君ユリウスの祭壇に生贄の如くに捧げ、財産を没収した（スエトニウス）。かく、オクタウィアヌスはイタリアの支配者になつたけれども、状況はむしろ悪化する。ローマの市はS・ポンペイウスにより糧道を断たれて饑餓が迫り、市民はパンを求めて反乱を起こす。カレヌスはアルプスの向こう側に、ポリオは執政官として、東方からはアントニウスが迫り、四面皆敵である。

紀元前四〇年九月、アントニウスはアエノバルプス、S・ポンペイウスと共にオクタウィアヌス討伐に向かう。オクタウィアヌスは圧倒的に不利の状況であるにもかかわらずこれを迎撃せんと出陣し、両軍はブルンディシウムに對峙する。オクタウィアヌスはここで全くの僥倖に助けられる。対立の元凶フルウィアが病没したことで両軍の兵士は戦うことを欲しなかつたのである。アントニウス側から執政官のポリオ（このときウエルギリウスの庇護者）、オクタウィアヌス側からマエケーナス（この年の暮にはウエルギリウスの庇護者となる）が出て、紀元前四〇年一〇月二二日いわゆるブルンディシウムの協定が正式に成立する。この協定の要点は、①イオニア海を境として東方をアントニウス、西方をオクタウィアヌス、アフリカをレピドウスが所有する。②オクタウィアヌスの姉オクタウィア（このとき二九歳）とアントニウス（このとき四二歳）との結婚（四〇年一〇月末ローマで挙式）。③各自の友人を順番で執政官につける、というものであった。海上の支配権を掌握するS・ポンペイウスが完全に除外されていることに注意しておこう。このことが後に重大な結果をひきおこす。ところでこの年、紀元前四〇年の冬、ウエルギリウスは「牧歌」の第四歌「黄金時代がやってくる」を書く。ウエルギリウスは「シキリアの詩の女神たちよ、いささか大いなることを歌おう」と自信をもつて第四歌を歌い出す。この第四歌はのち、「救世主の牧歌」と呼ばれることになるが、この歌は内戦そのものの回避を嬉んだことのほかに、オクタウィアヌスとポリオという対立する二人の恩人の間に平和が

やつて来たことを極めて率直に喜び、そこに自己の理想を込めて歌い上げたものである。この協定のうち、新しい執政官がつき、ポリオはマケドニアに総督として赴任し、おそらくこの前四〇年の末頃、ウエルギリウスはオクタウィアヌスの腹心の部下マエケーナスの知遇を得、オクタウィアヌスの破格の庇護を受けるようになるのである。

三頭体制はこうして再建されたが、S・ポンペイウスにしてみれば、まずアントニウスには共にオクタウィアヌスを討つという協定を無視され、ついでブルンディシウム協定でも完全に三頭体制から除外された。怒ったポンペイウスは報復として海上封鎖を断行してローマを食糧危機におとし入れる。三頭官はそれ以前にすでに重税をかけて市民の人気を失ない、物価騰貴が追い討ちをかけ、暴動すら起さる。オクタウィアヌスは仕方なくポンペイウスに接近し、ポンペイウスの義父リボの妹スクリボニアと紀元前四〇年のうちに結婚し、他方アントニウスと共にポンペイウスとの和平に臨む。いわゆる「ミセヌムの協定」(「プロテリーの和平」)、紀元前三九年夏のことである。この会談の様子はブルタルコス「アントニウス伝」に生き生きと描かれているが、結局、ポンペイウスはシキリア、サルディニア、コルシカ、アカエア(アルカディア)を含むペロポネソス半島)を領有し、海賊を掃蕩し、ローマに一定額の穀物を補給する。さらにポンペイウスの許に逃れていった政治的亡命者たちのイタリア帰還を許し、将来ポンペイウスとリボが執政官に就くべきことも約束された。こうして三頭体制にポンペイウスが加わり、いわば四頭体制が成立する。ウエルギリウスはこの年、つまり前三九年春に第六歌、夏に第八歌を書く。二歌ともに狂乱による人間の破壊の諸相が歌われ、いわばアルカディアにおける人間の悲劇が主題となっている。しかもこの年、ウエルギリウスの友人ガルス(の愛人、有名な女優であるキューテリス)が、ガルス讃歌の詩句を含むウエルギリウスの新作の第六歌を劇場で朗読して、三一歳のウエルギリウスは一夜にして、劇的な小品の作者としてローマで有名となってしまう。ウエ

ルギリウスが劇場に入ると、観衆は歡呼して迎えたとい<sup>11</sup>う。

イタリアをとりまく海の平和は以後三年間ほど続くことになるが、実はその年（前三九年）のうちに意外な方面から破綻しはじめる。オクタウィアヌスの妻はポンペイウスの義父リボアの妹スクリボニア（リボアの娘はポンペイウスの妻）であるが、オクタウィアヌスはリウィア・ドルジラと恋におち、年上でうるさいスクリボニアを突如離婚して、リウィアと大急ぎで婚約したのである（結婚式は前三八年一月一七日）。この離婚は明らかにポンペイウスに対する挑戦状になろう。他方、アントニウスも「ミセヌムの協定」に違反してアカエアをポンペイウスに渡そうとしな<sup>い</sup>。かくてポンペイウスは二頭の重なる協定違反に怒り、再び海賊行為を開始する。オクタウィアヌス配下の勇将アグリッパやカルウィヌスは不在であつて、オクタウィアヌスは今や単独で、しかも海戦で、海の冒険者・海賊の頭<sup>あたま</sup>に立ち向かう。前三八年、メッサナ海峡でオクタウィアヌスの艦隊は完膚なきまでに打ち破られ、すべての艦や人を失<sup>な</sup>ない。ローマでは市民たちが反戦を叫んでオクタウィアヌスに抵抗する。この恐るべき危機も、アグリッパがガリアから戻り、マエケーナスの巧みな外交とオクタウィアヌスの姉オクタウィアのとりなしで切りぬける。つまり紀元前三七年一月の、アントニウスとの「タレントゥムの協定」である。この協定で三頭政治は五年間延長され、アントニウスは船と將軍をオクタウィアヌスに貸し与え、かくてようやくオクタウィアヌスはポンペイウス討伐に専念できることになった。しかしこのときからほぼ一年半後の前三六年九月の「ナウロクスの海戦」に至るまでの経過は「牧歌の時代」から外れるので、以上でもつて「牧歌の時代」の時代の時代背景の叙述を終える。この前三七年の初頭、ウェルギリウスは「この最後の仕事を、アレトウーサよ、なにとぞ照覧あれ」と書き出された第一〇歌を書きあげて『牧歌』を完成する。次にはこの「牧歌の世界」を見ることにしよう。

### (三) 「牧歌」の世界

ここで考察するのは、これまで多くの文学研究者が試みてきたような「牧歌」の文学的、たとえばテオクリトスの影響如何、音節の音価の音楽的美しさ如何といった研究ではない。そうではなくて、デ・グレージアを援用すれば、アキュート・アノミーに遭遇して、アルコールに逃避せず、自殺もせず、また大衆運動にも投じようとならない人々、われわれの分析枠組でいえば、政治的な支配の理念や再建のユートピア、あるいは革命のミレニアムを志向しようとならない人々を考察の対象とする。つまりアルカダイア・牧歌の世界を構想する人々と、その世界の政治思想的意味を明らかにするにある。非政治的人間とみられている詩人が、実は、いかに深くその時代とかわり、その時代と対決し、悪しき現実政治を峠拒しつつ、そこにいかなる理想世界を作りあげていくかを考察しようとする。

ある人によれば「牧歌」・アルカダイアの世界は「逃避文学」<sup>(13)</sup> escape literature ということになるが、しかし詩人の直感によるその理想的景観こそ、詩人の精神的逃避を示すものでもなく、また詩人の現実政治からの事実上の逃避を意味するものでもない。逃避ではなくて現実の悪しき政治とは丁度逆の理想世界を提示することで、現実政治のみにくさ・おぞましさを浮かび上らせようとする詩人の抗議の姿勢の意思表示なのである。その理想世界は詩的直感による現実の対抗像にほかならないのである。

その詩的世界が時に難解を極めるのは、専ら詩人の韜晦もさることながら、むしろ「生きてあること」のための必死のレトリックなのである。敵対するものを情容赦なく肅清していく専制的政治体制にあつては、古く、プラトンの



『国家』で、「多数者の狂気」の支配する衆愚政治にあつて、「完全な哲学者」があえて「拒否の沈黙」の途をとつたように、自己の理想を表明しようとする知識人はこの所与の必然の環境条件を考慮に入れざるを得ない。現実政治との緊張関係、あるいは現実政治との鋭い対話なき文学作品は優れた作品とはいえないという一面があるのはこのためである。ウエルギリウスは土地没収に直面して「市民的抵抗」をおこなつたことは既に述べたが、「牧歌」によつても一度、専制的権力にプロテストするのである。

さてそれならばウエルギリウスの「牧歌」の世界は一体どのようなものなのか。いま製作年代順にその作品を検討し、そこに歌われた思想・精神を明らかにしていこう。訳はすべて河津氏の労作に従い、時にコンントンらを参照する。詩の雰囲気を知るためにすこし長く引用し、詩の引用の後には原詩の行数を示しておく。

(1) 第二歌。「牧歌」全一〇歌中の一番最初に作られた歌。紀元前四三年夏。羊飼いのコリュドンが美少年アレクシスに恋い焦れる少年愛をうたう。全部で七三行。

「いまは真昼。家畜の群れさえ日蔭を求め、緑色の蜥蜴とがけさえも、茨の茂みに身を隠す(八一九)」、「太陽は燃え、雑木林には蟬時雨(一一二—一三)」という夏の真昼どき、ぼくは「蔭濃き山毛櫨ぶなの林へ出かけ、ひとりぼつちで、むなしく熱情こめて、山と森を相手にわめき立て(一一五—一五)」る。「おお薄情なアレクシス、ぼくの歌を聞き流すのか？ ぼくを哀れと思わないのか？ きみはぼくを、ついには焦がれ死にさせるだろう(六一七)」。「アレクシス、きみはぼくをばかにして、ぼくがどんな人間か、どれほど多くの家畜をもち、どんなに白い乳を搾れるかを訊ねようとしな(一九)」。

こうなげきながら、羊飼いのコリュドンは、ぼくがどれほど立派なのか、どれほど多く立派なものを持つてゐるか、

敷えたてていく。その何とも楽しい、子供っぽい自慢話の中から、はからずも牧人の理想の生活環境が垣間みえてくる。理想の牧人の、いわば財産目録の如きものが描かれてくる。一番最初に作られた牧歌、この第二歌はいわばアルカディアの舞台装置の開示の如きものといえようか。

① 「ぼくはシキリアの山中に千頭も小羊を持っていて、夏も冬も、新鮮なミルクに事欠かないのに（二一一—二二）」。もちろんシキリアはイタリアのシシリー島であつて、ギリシャのアルカディア地方ではない。ウエルギリウスの「牧歌」が複合景観（故郷のマントウア、移り住んでいたナポリ、そしてギリシャのアルカディアの風景の合成）であることをよく示している。ここでは「ぼく」が恐るべき財産家であることをいうのに、「千頭も小羊」を持っていくと、季節を問わず「新鮮なミルク」が沢山あることを挙げてゐる。

② 「ぼくは歌も歌えるぞ。テーバイのアンピオン（竖琴の名手）がアッティカのアラキュントスの山の中で、牛の群を呼び集めるとき、いつも歌っていたように（二三—四）」。アルカディア人たる第一の条件は歌が上手であること。

③ 「それにぼくは醜くもない。ついこのあいだ風が止んで、海が鏡のようになつたとき、海辺で水に映つた自分を見たが、その水鏡がまことであれば、きみの前でダブニスと美を競つてもいい（二五—七）」。ダブニスはシキリアの羊飼いの花型、ニンフのお気に入りの美少年、のち第五歌ではカエサルにたとえられている。

④ 「ああ、きみがぼくと田舎へ行き、その粗末な小屋に住んで、鹿を射たり、小山羊の群れを、緑の錦葵<sup>アルデア</sup>で追つたりする気になつてくれたら（二八一—三〇）」。田舎の森の中の粗末な小屋が牧人の御殿である。絢爛豪華な住宅ではない。

⑤ 「ぼくは牧笛を持っている。長さの違う七本の葦からできている笛だ(二六六)」。牧笛はパンが持っている例の牧笛である。牧笛は原文では *cicuta* (キクタ)、毒人參の意味があり、*コニントン* は *cicuta* を *hollow hemlock stalks* (毒人參の中空の茎) と説明し、ボール・アルパースの「牧歌」の新訳では「I have a well-joined pipe of hemlock stalks of different lengths」と訳している。河津氏の訳がよいと思われる。

⑥ 「そのほかに、危険な谷で見つけたのだが、二頭の麋もろを持っている。その背にはいまでも白い斑まだがある(四〇一一)」。危険な谷で見つけたことで、一層贈り物としての価値が出よう。麋は鹿の一種、その白い斑点は生後六ヶ月できえる。

⑦ 「ここにおいて、おお美しい子よ、そして、ごらん／妖精たちがきみのために、籠いっばいの百合を運んでくるのを(四五―六)」。花こそ牧人の財産であって、ここには百合がでてくるが、後文にはストック、ケシ、水仙、インド、肉桂、ヒヤシンス、マリゴールド、月桂樹、天人花が出てくる。

⑧ 「ぼく自身はマルメロを―うっすらと白い粉をふいた実を／それから栗と胡桃を集めよう(五一―二)」。アルカディア人の食べものとして、ここには栗、胡桃、マルメロ、そのほか、すもも、ミルク、鹿の肉など。自然の与える果実であって、人工的な贅沢な食物は存在しないようだ。

なおこの第二歌では、夏の真昼どきから、いつしか時が経ち、「ごらん、牡牛が軛に犁を掛けて、家へ帰ってゆくのが見える／西に傾いた太陽は、影の長さを倍にのぼした。それなのに／愛はぼくの胸を焦がしている。愛に分別はないからだ(六六―八)」と夕暮れの情景に移っている。夕暮れのかもし出す一種の哀感については、後に、第一〇歌のところで言及しよう。パノフスキーはウエルギリウスが「夕暮の悲哀と静穏」を発見したと言っているから。

さて以上の列挙から、アルカディアの牧人の生活が自然に密着した極めて質朴な、簡素な生活であることがわか

る。コケインに見られる途方もない贅沢さの支配する田園ではなく、またミレニアムの新しいイエルサレムに見られる黄金で輝く都市とも全く無縁である。そしてまた、この簡素な田園生活こそ悪徳の都市に対する一つのアンチ・テーゼであることにも留意しておこう。ウエルギリウスはまず、「牧歌」で、都市に対する田園の簡素な生活の讚美者として出現したのである。

(2) 第三、五、七歌。紀元前四二年の春から夏。この年、遅筆のウエルギリウスにしてはめずらしく多産の年であったようだ。しかしいづれも歌合戦の形式をとる同一詩形である。

第三歌(全一一行)は二人の羊飼ひ、メナルカスとダモエタスが軽口をたたき合っているうちに一体どっちが歌上手なのか勝負しようということになる。ダモエタスは牡牛をかけ、メナルカスは最初ブナの木製の杯一組であったが、結局同じ牛をかけて勝負する。審判のパラエモンはいう。

では歌いたまえ、みんなやわらかな草の上に坐つたから／いまは最も美しい季節、いまやすべての畑、すべての木々が／つぼみを持ち、森はゆたかに葉を茂らせている／さあ、ダモエタス、きみから先に。それからメナルカス、きみが続けるのだ／掛け合いで歌うがよい。詩の女神はそういうやり方がお好きだから／(五五―九)。

こうして始まった牛をかけての「重大」な試合は、審判のパラエモンによれば「これほどの勝負に審判を下すとは、わしにはできぬ(一一〇八)」ということ引き合けとなる。

第七歌(全七〇行)も同じ紀元前四二年春に作られた同じ歌合戦である。二人の羊飼ひ、コリュドンとテウルシスが競い、ダブニスが審判をつとめる。この歌合戦の様子は二人が四行詩の応酬を六回くり返(二一―六八行まで)し、

観戦者メリボエウスの言葉によれば、「わたしに思い出せるのはこれだけだが、テウルシスは健闘の甲斐もなく敗れ／その時から歌い手といえはコリュドン、コリュドンといえは歌い手／ということになった（六九―七〇）」。

第五歌（全九〇行）は前四二年夏に作られた。名人と自称する二人の牧人メナルカスとモプススの歌合戦の形をとるが、三、七歌とはすこし違って、明確な主題がある。暗殺されたカエサルのことをダプニスと呼び、モプススはダプニスの死を、メナルカスはダプニスの神格化を歌い、最後はそれぞれ相手の歌を誉め称え、互に贈物（メナルカスは葦笛を、モプススは杖を）交換して終わっている。

「歌合戦 (singing-match)」は「対話体の詩 (amboeban singing)」という「掛け合い形式の歌」で、河津氏の第三歌の解説に詳しいのでそちらを参照して頂こう。ここでは次のことに注目しておきたい。それはこの三歌を通じて最大の特徴は何かということである。第七歌でメリボエウスは「きみも、もし、ちよつとこのあいだサボれるなら木蔭で一息入れたまえ（一〇）」と誘われて、コリュドンとテウルシスの歌合戦の見物に加わる。第五歌ではメナルカスとモプススは羊の番を他人にまかせて歌合戦に夢中になる。第三歌ではパラエモンが言うように春の最も美しい季節に「みんなやわらかな草の上に坐つて」歌合戦に打ち興じている。また第五歌には牧人の死を送る葬儀もある。ポール・アルパースはこのように牧人が集まって歌合戦を行ない、その歌が自然と共鳴するこの田園のコミュニティを「歌の共同体 community of song」<sup>16)</sup>と呼んだ。またリーチ女史が三、五、七、九歌の対話体の詩について、「話し手である牧人たちはこの田園の世界に対する共通の愛で結ばれている」と指摘するのも同じ事態を指している。つまり三歌を通じての共通項として「歌の共同体としてのアルカディアー」、一般的にいえば、ある共通の雰囲気をもつささやかな共同体としてのアルカディアーと規定してよからう。

そのほか是非指摘しておきたいことは、第五歌のダブニスの死に關してである。紀元前四二年はレピドゥスとプラックスの執政官の年であり、その年頭の新執政官就任の日、一月一日にカエサルを國家の神々の列に加えたことである（この年の一〇月にはピリッピの戦いでブルトゥスら暗殺者たちがほぼ全滅している）。ダフ教授によれば、「ダブニスの神格化を歌う第五歌は紀元前四二年七月「十二日」、故カエサルの誕生日の「神とされた後の」最初の祝賀のために書かれたものと解される」という解釈で学説は一致しているようである。またウエルギリウスのカエサル熱も多くの学者の説くところであつて、ウエルギリウスはその没後二年目にして大々的にカエサルを贊美する。ただしこのときウエルギリウスは小カエサル（オクタウィアヌス）とは全く接觸がなく、アントニウスの腹心の部下ポリオの庇護を受けている。第五歌でいう、「非業の死を遂げたダブニスのために、妖精ニンフたちは涙を流した（二一〇）」、「ダブニスよ、あなたの死にカルタゴの獅子さえ叫いた（二二七）」と。そしてウエルギリウスはダブニスの死を牧人の葬送の習慣に従つて送る。モプススの歌にいう、「ダブニスは遺言している——／牧人たちよ、地面に花びらや葉を撒きらせ。泉の傍に木を植えよ／それから墓を築き、その墓に、つぎの歌を刻みつけよ、と／われはダブニス、森の住人、天地にあまねく知られたり／美しき家畜の番人なりしが、さらに美しきはこのわれ／（四一—四）」。

他方メナルカスは、「彼（カエサル）は神だ、神になつたのだ」といい、さまざまものをカエサルの供物台に捧げることゝ約束する。それは「新鮮な乳で泡立つ杯を二つ」、「良質のオリヴ油の器を二つ」、大杯に注いだ葡萄酒、そして歌と踊りである。ウエルギリウス伝で注記したように、ウエルギリウスのカエサル熱は青少年時代を通じて変わらなかつたようであつて、ここカエサルの神格化に至つてその頂点に達する。このカエサル熱は、ほどなく、次に見るように土地没収そして返還という大事件を介して、若きカエサル（オクタウィアヌス）への深い信頼へと発展して

いくことになる。なおまた、この第五歌ではダブニスの墓が築かれている。つまりアルカディアー人の墓である。中世紀、近世紀の人々はアルカディアーでは「人々が永遠の若さを享受」しているが故に、アルカディアーには死はないものと思ひ込んでいたふしがある。

(3) 第九歌、第一歌。第一歌（全八三行）は前四一年の晩秋、第九歌（全六七行）は前四一年春。この両歌、成立年代の推定はむづかしいようであるが、ダブ教授の説くところに拠れば、「第九歌は、詩人が前四一年オクタウィアヌスに感謝している第一歌の前に書かれたのか、あるいは第九歌は次の年に属するのかは、大して重大な問題ではあるまい。要するにこの二つの歌は兵士たちに土地を奪われた農民の困しみを反映しているものである」と。またチャールス・セガル氏は、「牧歌の一と九は明らかに互に対（pendants）であると思われる。双方とも平和な・親しい世界からの追放を扱い、かつ追放に直面している牧人とこれまで通り田園の世界に憩うている牧人との対比（ただし牧歌一の方がはるかに強く・パセティックであるが）を描き出し、のみならず双方とも（牧歌六と一〇と同じように）憩いと夕暮のテーマで終っている」と述べている。たしかにこの両歌は思想的にも構成的にも極めて類似性が大きいので、まず、この点を確認しておきたい。

第九歌はリュキダスという若者とモエリスという老人の対話で構成されていて、次のように始まっている

歩いて、どこへ行くのですか、モエリス？ これは町へ行く道ですが／おお、リュキダス、生き長らえて、こんな目に遇ってしまった／夢にも思わなかつたことだが、よそ者がこのささやかな農場の持主になって／こんなことを言った、この土地はおれのものだ、前の住人は外へ行けと（二一四）。

この冒頭の部分の短い引用から、この第九歌の全構造が読みとれる。一言でいえば、秩序 *cosmos* と混沌 *chaos* の対比、アルカディアを象徴するものと非アルカディア的なるものの対比である。リュキダスとモエリスを設定することで、まず土地を没収され今や退役兵士の使用人になりさがってしまった老人とこの田園にくつたくなげに止まっている若者との対比、よそ者とささやかな農場の持主、町と田園、さらに後文には軍人と詩人、鷲と鳩の対比もある。つまり表にしてみると、

カオス	コスモス
モエリス・追放・老人 町 (urbs)	リュキダス・アルカディア・若者 アルカディアの地
よそ者 <i>advena nostri</i>	ささやかな農場 <i>agellus</i>
軍人 <i>nostri</i>	詩 <i>carmen</i>
鷲 <i>aquila</i>	鳩 <i>columba</i>
今 (土地没収)	昔 (アルカディア)

このような対比のあと、突如、カオスがコスモスを襲撃する。平和なアルカディアに突然野蛮な権力が垂直的に

侵入してくる。土地没収の嵐である。ウエルギリウスはモエリス老人に三たび土地没収につき歌わせる。まず最初に、それより、この詩はどうだ、未完成だが彼〔メナルカス即ちウエルギリウス自身〕がウァールスに宛てて書いたものだ／ウァールスよ、もし、マントウアをほんのすこし、われわれに残してもらえたら——ああ、マントウアは、不幸なクレモーナにあまりにも近い／歌う白鳥にきみの名を、天の星まで高めさせよう (二六一九)。



これは土地収容委員のウァールスに、土地を没収されたメナルカス（『ウエルギリウス』）が急遽故郷に戻って土地返還を懇願したときの様子であるようだ。土地所有者として土地没収に抗議したのである。しかしウァールスは取りあわない。

次に同じくモエリスの昔の歌であるとの想定のもとに（今の歌であるとはさしきわりがあつてとうてい言えないから）、こゝう歌う。

ダブニスよ、なぜ、古い星座が昇るのを見ている／デイオーネーの後裔カエサルの星が昇るのを見よ／野によるこぼしい実りをもたらし／日当りのよい丘の上の葡萄の房を色づかせるその星を／ダブニスよ、梨に接木せよ、

その実はおまえの子孫が取り入れよう（四六一五〇）。

難解であるが河津氏やコンントン氏の注釈を参考としつつ次のように解したい。「羊飼いたち（の代表であるダブニス）よ、いつまでも古い星座（シジタム）（古い暦と解す）に頼っていなさるな／デイオーネの後裔に当る（小）カエサルの・正しい・みのりをもたらす・新しい星座（暦）が昇りつつあるのに。牧人たち（ダブニス）よ、その新しい暦に従っていま梨の木に接木せよ、梨の木は実をつけ、きみ（たち）の子孫がその果実を享受しよう」。一見なんでもない詩のように見えるが、最後の一行（第五〇行目）は「いま（小）カエサルの新しい暦に従って農事にいそしめば、必ずや子孫に大きな利益が与えられよう」と解する。この部分は、現実的には、小カエサル（つまりオクタウィアヌス）の台頭とその土地没収のことを逆から歌ったことになり、いわばオクタウィアヌスを「ほめ殺し」したことになり、真意は河津氏も指摘するように、土地没収を断行した三頭官、とりわけオクタウィアヌスの土地没収への、巧妙をきわめた・痛烈な批判あるいは抗議となる。われわれの言葉でいえば、現政治への「精神的抵抗」、「良心的忌避」を表明

したのである。

ついで、三たび、土地を没収されたモエリスに、これまた昔の詩であるとの想定（／＼）のもとに、こう歌わせる。

ここへおいで、おおガラテア〔海の妖精〕、海の中にどんな楽しみがあるのか？／地上はまばゆい春の季節、ここ  
では大地が川岸に、多彩な花々を咲かせている／この洞穴の上には、銀色のポプラが枝をひろげ／からまり合っ  
た葡萄の蔓が、影のレースを織りなしている／ここへおいで、荒々しい波には、岸辺を打つにまかせて（三九―四  
三）。

最後の二つの歌、モエリスの「昔」の二つの歌は基本的には対をなし、悪しき現状（昔のこととなっているが）を  
麗しのよき昔（これは没収前の本当に昔の話）との対比がなされ、これによって現実の政治を巧妙に批判し抗議した  
のである。詩の最後の段では、もう昼さがりとなっているが、若いリュキダスが老人のモエリスをいたわりつつ、墓  
（／＼）の見える場所で、しばし一ぶくの歌を歌いながら、やがて夕暮れの迫らんとする町（／＼）に向かっていく。

紀元前四年の晩秋に成った第一歌も、基本的には、第九歌と同一の構造をもつ。登場人物は、第九歌と同じく、  
土地を没収されたメリボエウス老人とアルカディアーに幸に止まっているティータユルス老人が対比され、故郷  
（*patria*）と野蛮人（*barbarus*）、自由（*libertas*）と奴隷（*servitus*）、不和（*discordia*）と安らぎ（*otium*）、町とア  
ルカディアーが対比される。ここでの基本構成は、第九歌と同じく、平和なアルカディアーに突如野蛮人が侵入して  
くるというイメージであつて、まず安らかなアルカディアーのたたずまいが次のように明示されることからこの第  
一歌は始まる。

ティータユルス、おまえは、大きな大毛櫛の下蔭に寝ころび／細い葦笛を口にして、森の調べを吹いているね／

だが、わしは、愛する農場をあてに郷里を出る／故郷から逃げ出すのだ／それなのに、ティーテュルス、おまえは木蔭でのんびりと／うるわしのアマリスを森に教えこんでいるんだね（一一五）。

牧人はのんびりと木蔭で葦笛を吹き、自然は平和にして静寂そのもの。雉鳩のくぐもり声や柳の生垣に蜜蜂が飛んできて蜜を吸うときのかすかな葉ずれの音さえ聞え、人を眠りに誘うおだやかな日。去り行くメリボエウスはいう。

幸福な老人よ、おまえはこのなじみ深い川のあいだで／聖なる泉の傍に、木蔭の涼しさを求めるだろう／この境界線のところでは、柳の生垣がいつものように／ヒュブラの蜜蜂に花の蜜を吸われ、／かすかな葉ずれの音をたてて、おまえを眠りに誘うだろう／この高い崖の下では、木鋏を持つ男がそよ風に向かって歌い／おまえのお気に入りの雉鳩や数珠掛鳩が／高い楡の木のとっぺんから、くぐもり声で鳴きつづけるだろう（五一―八）。

このような平和な故郷・パトリアに、突如、野蛮人が垂直的に侵入する。

よこしまな心の兵隊が、こんなにもよく耕した畑の持主となるのか？／この畑を野蛮人が？内乱が市民を、どれほど不幸にしたかを見るがいい／わしはこんなやつらのために、畑に種を蒔いたのではなかった（七〇―二）。

土地を奪われた農民は、あるいは使用人となって屈辱的にもかつては自分の土地、自分の家であったところに住むか、あるいは土地没収の命令者オクタウィアヌスと敵対するシキリアを根拠地とする海賊の首S・ポンペイウスの許に亡命するか、あるいはローマに出て無産者の群の中に入るか、あるいは兵士となって遙かなるアフリカへ、ブリタニアへと生還を期待できずにおもむくか、六〇才以上の年長者であるなら占領地の駐留軍として軍務につくかのいずれかであった。メリボエウス老人はこのアルカディアーを追われてどの途を辿ろうとするのか。故郷を追われた者の悲しみの深さは、そのまま現政府への深い絶望、幻滅である。第一歌の最後の部分は、アルカディアーに留まるティー

テュルスが次のように歌って終りとなっている。

でも、今夜はここで、わしと一諸に、ゆつくり休んでゆけるだろう／緑の草の葉の上で。熟した林檎も、チーズもここにはどっさりある／ほら、むこうの屋根からは、夕餉の煙が立ちのぼり／高い山から日蔭が、いよいよ長く伸びてくるから（七九―八三）。

メリボエウスの行方定めぬ運命はアルカディアの夕暮れに限りない哀感をただよわせている。メリボエウスとは逆に、ティーテュルスは全くの僥倖によって安らぎを得た。もちろんティーテュルスはウエルギリウスの分身であつて、ウエルギリウスがローマに上つて土地返還の勅令を受けたときの状況をやや粉飾はなされていようが、その大筋を伝えているものようである。ティーテュルスは歌う。

メリボエウス、わしは人々がローマと呼ぶ町を、愚かにも／こごらの町と同じようなものだと思つていた。われわれ羊飼いが／まだ幼い小羊を売りにいく、あんな町と同じくらいのものだと／子犬は親犬に、子山羊は母山羊に似ているから／わしはいつも、小さな町を見て大きな町を想像して／ところがローマはあらゆる都市の間で、だんぜん高く聳え立つていた／糸杉が莖<sup>がまづみ</sup>迷<sup>ま</sup>の間では、常に高く聳えて見えるようにね（一九―二五）。

都市はウエルギリウスにとつては田園と対比されたカオスの地であるはずである。とくにローマはいわば政争と悪徳との本源であるはずであつた。そのローマがなぜ「あらゆる都市の間で、だんぜん高く聳え立つ」良き存在へと変つてしまつたのか。この素朴な疑問をメリボエウスは卒直に問い、答を求める。

それでローマはどんなご利益があつたのだ／自由だ、それはのろまなこのわしに遅まきながら目をとめた／切り落した髭<sup>ひげ</sup>に白いものが混じるようになってから／自由はようやくわしに気づき、ようやくのことで訪れてくれた

ここでティーテュルスが自由と言っているのは、もちろんウエルギリウスにとっては土地の返還のことである。ティーテュルスは自由を得、メリボエウスは土地を追われる。この運命の岐路はどうしようもないこととティーテュルスは歌う。

わしはどうしたらよかつたのだ？ローマ以外の所では、奴隷の身分からぬけ出すことも、これほど利益のある神様を、見つけることもできなかったのだから／メリボエウスよ、あそこでわしはかの若者を見た／その方のために、わしの祭壇は、年に十二回ずつ煙るのだ／あの方がわしの切なる願いを、聞き届けてくださったのもそこだつた／「子供たちよ、牛を養え、以前のように、牡牛を飼え」と(四〇―五)。

かくてウエルギリウスはオクタウィアヌスによる土地返還の勅令を得て、このアルカディアに留まることができた。ウエルギリウスは、いまや、この二二歳の若者オクタウィアヌスを神と呼んではばからない。

ああ、メリボエウス、この平和なひとときは神様の賜物だ／あの方はわが永遠の神。だから、わしはあの方の祭壇に／小屋から小羊を引き出して、その血を注いでいる。ごらんとおり／あの方は、わしの牛が歩き回り、その主人たるわしも好きな曲を／野の葦笛で吹けるようにしてくださったのだからね(六一―一〇)。

第一歌と第九歌は確かに対をなし、その構造は極めて相似している。しかし、決定的に異なる点もあり、それはティーテュルス(ウエルギリウス)がこのカオス・共和政末期の恐るべき政治的混乱と社会不安を克服する神の姿をこの若者・若きカエサル・オクタウィアヌスに見出したことである。第一歌には、小カエサルの政策への鋭い批判と、にもかかわらず彼に大きな期待をかけるというアンヴィヴァレントな心のゆれ動きがみられる。メリボエウスには苛酷

な運命ではあったが、ティーテュルス（ウエルギリウス）が極めて楽観的であるのは、土地返還を契機に大カエサル熱が小カエサル熱に置きかえられ、その将来性を洞察するある直感が働いたからではあるまいか。この若き神が、やがては、この不幸な友人メリボエウスをも救済しうるパックス・ローマーナの招来者たることを見てとったからではあるまいか。このことは次の第四歌を見ることによつて明らかにならう。

(4) 第四歌、紀元前四〇年冬。邦訳の表題「黄金時代がやってくる」は訳者河津氏の命名であつて、原詩や英・独訳にはない。「牧歌の時代」の節でも説いたことであるが、この第四歌はペルーシアにおけるアントニウスの弟ルキウス、アントニウスの妻フルウィアとの戦い（紀元前四〇年二月）で崩壊の危機を迎えていた三頭体制が、ほぼ八カ月の後、前四〇年一〇月のブルンデイシウムの協定によつて再びしつかと固められ、平和の到来が確実に見えた時期に書かれた。「この第四歌は」ダフ教授によれば、「コンスタンチヌス大帝〔在位三〇六―三七〕の時代以後、教会では一般的にキリスト降臨の予言と考えられてきた」<sup>(17)</sup>。そして「ウエルギリウスのこのいわゆる Messianic Eclogue〔救世主の牧歌〕について書かれた文章は尨大なものになるが、その正確な意味如何については、恐らく解決不可能であろう」とラヴジョイとポアズはその主著の中で指摘していた。この第四歌にキリスト降臨の予言を見るか否かは、恐らく信仰の問題にかかわるのであつて、パターソンの紹介する一六世紀のスペインの学者ルンドヴィコ・ヴィヴェスは次のように断言している。「信じない者は黙れ！ なぜなら、その言葉の単純な意味においてさえ、全くいかなる寓意すらなく、ここに語られているものは、明らかに、ほかならぬキリストについてのみ当てはまると理解されるべきであるから」と。この第四歌の救世主の問題、この「子」は果してキリストを指すのか否かは大変興味ある大

問題であるが、詳細は河津氏の所論にゆずつて、われわれはこの詩全体の構造とその思想分析に重点を置こう。

この第四歌は次のように始まる。

シキリアの詩の女神たちよ、いささか大いなることをうたおう／葡萄畑や地味な檉柳キナノキが、万人の気に入るわけではない／森をうたうからには、執政官にふさわしい森をうたおう／クマエの予言の告げる、最良の時代がやってくる／偉大なる世紀の秩序がふたたび始まる／いまや乙女は帰り来り、サートウルヌスの王国が戻ってくる／いまや新しき血筋が、高き天より遣わされる／汚れなきルーキーナ（お産を司どる女神ディアーナのこと）よ、すみやかに、安らかに子を生あれさせたまえ／その子によって、鉄の種族はついに絶え、黄金の種族が／全世界トール・ワールドに立ち上る（一一一〇）。

ウエルギリウスは「最良の時代」・「黄金の時代」・「サートウルヌスの王国」をもたらず「子」供の誕生をこのようにうたい、この「子」の生長にともなつて、イタリアのみならず、「全世界」が次のような三段階を経て平和な世界に至ることを予言する。次には段階を追つて、この三つの時代を省略なしで、やや長いけれども引用しよう。

第一段階、子供の誕生。この子供の誕生と共に大地はかぐわしい色とりどりの美しい花を玩具として与え、猛き大獅子もその本性を変えて牛馬と共に居り、蛇や毒草も姿を消す。つまり自然は、動植物を含めた全自然界に、もはや相互に争うことはなくなり、ましてや人間に敵対することもなく、親しい存在にその本性を変えてしまう。この本性の変化という劇的変化はやがて人間にも及ぶことになる。この子供は神々と英雄たちの薫陶の下で幼少期を送ることと帝王の学をおのずと身につけ、やがて平和な世界を統治することになる。詩をひけば次のようである。

その子は神々の生活に加わり、英雄たちが神々と交わるさまを見／みずからも彼らと共にあつて／父の徳がもた

らした平和な世界を統べ治めよう／しかし、子よ、耕されぬ大地がおまえに贈る最初の小さな贈物は／至るところに萌え出る這い常春藤きざつたと鹿の子草／ほほえむアカンサスにまじる未草ひつじき／牝山羊は乳房に乳を満たして、ひとりで家に帰り／牛馬は大獅子を怖れず、おまえの揺り籠はおまえをあやそうと／ひとりでに愛らしい花を咲かせよう／蛇は死に、人目を欺く毒草も絶え／地上にあまねくアツシリアの香木が生えてこよう（一五―二五）。

第二段階、青少年時代。この子供が成長して青少年時代に達するころ、麦は種蒔くことなく独りで黄金色の穂波を打ち、茨の木には葡萄が、櫛かむの木には蜜があふれる。自然は完全にその本性を変え、その恐るべき生産力もて、人間の生活を豊かにしよう。しかし人間はまだ本性の転換は完全ではない。まだ文明力が海や大地を脅かし、戦争が突発する。なお次に引く詩中にみえるティピュスはアルゴ―船の舵手である。アルゴ―船とはテッサリアの王アエソンの息子イエソンの乗る船の名で、多くのギリシャの英雄たちを乗せ、黄金の羊毛を求めて、黒海の東南にあるコルキスまで大遠征を行った。<sup>(18)</sup> ウェルギリウスは書く。

だが、やがて、おまえが英雄の勲と父の事績とを読み／男らしきの何たるかがわかるようになった時／野はゆるやかに波打つ麦の穂で、赤い葡萄の房が垂れ／堅い櫛かむの木は露なす蜜に濡れるだろう／それでもなお、以前の悪徳の残滓が人をかり立て／海の精を小舟でおびやかし、町に城壁をめぐらし／大地に畝を刻ませるかも知れぬ／その時は、第二のティピュスが現われて、第二のアルゴ―船が／選り抜きの英雄たちを運ぶに違いない。そうしてまたも戦争が起り／大アキレウスが、ふたたびトロイアへ送られよう（二六―三六）。

第三段階、壮年時代。ウェルギリウスの歴史発展論はこの第三段階に至って頂点に達する。この歴史的発展は、自然と人間を脅かす悪しき文明力の衰退とそれに代る自然そのものの巨大な生産力増大にある。そしてその根底には、



たとえば大地に鋤を入れたり、葡萄を鎌で刈ることが大地や自然を傷つける、船は海を脅やかすとの考えがある。従つて、生産力の大きさは、自然そのものの自ら「すべてを生み出」すその自然的生産力に依存する。交易も戦争もする必要がなくなる。かつてアルゴ―船が求めに行つたためずらしい黄金の羊毛も、この時代になれば、さまざまな色調をもつ羊の一種にすぎなくなる。牧場に赤紫、黄色、紅などの羊が群れ集まつている風景は、いかにも明るく華やかで楽しい光景ではある。ウエルギリウスの詩を見よう。

その後、時の力がおまえを一人前の男に仕上げたとき／交易の舟人さえも海から退き、松の木づくりの船も／商品運ばなくなるだろう。すべての土地が自らすべてを生み出し／大地が鋤に、葡萄が鎌に苦しめられることもなくなり／たくましい農夫もまた、牡牛の軛をはずすだろう／羊毛は種々の色に染められずとも／牧場の羊がその衣を、自ら快い赤紫に／サフランの黄色にと変えるだろう／燃えるような紅が、草食<sup>は</sup>む小羊をひとりでに飾るだろう（三七―四五）。

アルカディアーという田園の理想郷はユートピアとは違つて単純再生産の繰り返される歴史的発展のない世界ではない。子供の誕生を契機に、アルカディアーは段階を追つて拡大し、質的に高められ、全世界(totumundo)全地球に、全宇宙にの意)の「黄金の種族」化、全世界の「アルカディアー」化が起る。しかも彼らはこの第三段階に至つてもなお節度ある豊かさの中に憩うていると見られる。

(5) 第六歌、第八歌、前者は紀元前三九年の初めの頃、第八歌は同年夏頃の作。

第六歌(全八六行)には序(二―二二行)があり、アルフェーヌス・ウァールスに捧げることになっている。ウァー

アルカディアーの誕生・ウエルギリウス

ルスは紀元前四一年北イタリアの土地没収委員で、既にのべたように、ウエルギリウスの土地没収を行い、取りつくしまもなかったが、ガルスのおかげでオクタウィアヌスの勅令を得てからは大変親切に土地配分をやり直した。この年M・ケンソリヌスとC・サピヌスを継ぎ、C・バルプスと共に執政官となる。ウエルギリウスの詩はこのウァールスに捧げられた。またこの第六歌はこの年ガルスの愛人キューテリスが劇場で朗読してウエルギリウスは一躍有名詩人となる。

序に続いて一三行目から三一行目までは、酔っ払ったシレノスが二人の若者と水の精アエグレーに強制されて歌をうたうまでの経過である。さて問題はこのシレノス（山野の精、すばらしい智恵の持主）の歌であるが、ウエルギリウスはエピクロス哲学に依拠しつつ、天と地、そして万物の生成を次のように語らせる。

彼は歌った、大いなる空虚の中で／土と空気と海の原子と、液状の火が凝縮したさまを／万物が、これらの原子からいかにして生まれ／やわらかな球形の宇宙そのものが、どのように凝固したかを／つづいて陸地が固くなり、ネレウス「海神」は海へと押しやられて／次第に事物の形が定まっていったさまを／やがて大地は、新しく生まれ出た太陽が輝きつつ昇るのを驚き眺め／空高く遠ざけられた雲からは雨が降る。すると、まず／森となるべき木々が生え、まだ数の少ない動物たちが／やがては峨々たる山となる丘の上をさまよい歩く（三二—四〇）。

この天地生成の話は、旧約による神の天地創造神話よりもはるかにわれわれの理解に近い。ともあれこうして地球上に生物が登場し、やがて人間の出現となるが、それは次の行、第四一行でシレノスが「ピュラーの投げた石」と歌っているように、ユピテルによる大洪水のあと二人だけ生き残ったプロメテウスの子デウカリオンとその妻ピュラーは、人間が生ずることを願う女神テミスの神託に従って、頭ごしにそれぞれ石を投げるとそこに男女の人間が新生し

た。<sup>(19)</sup> 人類の誕生である。シレノスは以下でさまざまな人間の悲劇をたたみかけるように歌っていく。いまこれを河津氏の注釈に従つてその順に述べると、

① ヒュラース。アルゴ―船の乗組員。キオス島に寄港したとき、泉に水を扱みにいき水の精にさらわれた。船は彼を残したまま出港する。

② クレータ王ミノスの妻パーシパエは真白な牡牛に恋をしてしまい、牛頭人身の怪物ミノタウロスを生む。

③ テイリンス王プロイトスの三人の娘はユーノーの怒りにあい、牝牛と思ひこんで牛の真似をしながらペロポネソス全土を走りまわった。

④ 足の早い王女アタランテー。求婚者と足の早さを競い、負けた男を次々と射殺したが、メラニオンが金のリングを持ち、追い抜かれそうになるたびにそれを投げ、アタランテーがそれを拾っている間にゴールに入った。

⑤ パエトーンは太陽神の子、父の車を御して墜死した。その姉妹たちはその死をなげき、四ヶ月の間泣き続けて榛の木となつてしまふ。

⑥ ウエルギリウスの大の友人ガルスがベルメツソス川のほとりをさまよっているのを、詩の女神が救い出し、詩神アポロンの子リノスはガルスを詩人ヘシオドスの後継者として賛えた。ここに突如ガルスへの讃歌が出現することで古来多くの学者を悩まして来たようである。

⑦ メガラ王ニーススの娘スキュラ。「彼女がその白い腰のまわりに、吠え立てる怪物どもを帯のようにつけて／オデュッセウスの船を襲い、渦巻く海の深みに引き込み、ああ／慄えおののく水夫たちを、海豹の群れで引き裂いた」。

⑧ トラキア王テレーウスはアテナイの王女ピロメーラを妻に迎えてイテュスという子を得たが、妻の妹のプロク

ネーを愛してしまい、秘密がばれないように彼女の舌を切ってしまった。これを知ったピロメーラはわが子イテュスを殺し煮て、「料理」としてテーレウスに食わせ、そのあとでイテュスの頭と手足を「贈物」としてテーレウスに送った。激怒したテーレウスは姉妹を殺そうとするが、神々は姉妹を憐れんでピロメーラをナイチンゲール（さよなきどり）に、プロクネーを燕に、テーレウスを「やつがしら」という鳥に変えてしまう。

このテーレウスの物語りのあと、ウエルギリウスは次のように綴って第六歌を終えている。

ずっと昔、幸福なエウロータス川がアポロンから聞き／月桂樹に命じて記憶させた、すべての歌をシレノスは歌う／谷は強く心を打たれて、空の星まで彼の歌を運ぶ／宵の明星が若者たちに、羊を小屋に集め数を数えよと促しながら／不満顔をした空にすみ出るまで（八一―六）。

ここに引いた「すべての歌をシレノスは歌う」という句からもわかるように、シレノスが天地の生成から始まる悠久な時代を叙事的に語ることに、歴史を語ることにそれ自体に意味があるとしなければならぬ。つまり語り部シレノスが人間の長い歴史を一瞬のうちに、パノラマのように眼前に彷彿とさせ、さまざま人間の生きざまを次々に開示し、そこに貫ぬく人間の破滅の諸相、人間の狂気を明示し、それに対するウエルギリウスの限らない同情あるいは哀感を表示したと見る。最後の二句、夕暮れの哀調が、パノフスキーの言うように、この詩の主題・アルカディアーにおける狂気哀感をみごとにひき立てている。

第八歌（全一〇行）はかつてのウエルギリウスの庇護者ポリオに捧げられた。ポリオは紀元前三九年イリュリア（現ユーゴスラビア南西部）でパルティア人に勝ち、この年前三九年一〇月二五日に凱旋式を行なうことになるが、この詩はそのポリオの帰還を前にして書かれた。牧人ダモンは失恋した男の嘆きを、アルベシポエウスは冷たい夫の

心を魔法でとり戻そうとする女心を歌う。第六歌が宇宙大に拡大された人間の悲劇を歌ったものとするれば、この第八歌はアルカダイアーというごく限られた小宇宙の男女の悲劇と喜劇を歌ったものとして、第六、第八の両歌は対になつていると考えられる。

ダモンはニューサという許婚者の心変わりやを歌う。ダモンは、「わが妻ニューサ」と呼んでいるが、河津氏もいうように、恐らく許婚者、しかも必ずしもダモンがニューサの許婚者である必要もない。もつと一般的な、普遍的現象として失恋を歌つていられるとも考えられるからである。とまれ、彼の初恋はこうして始まつた。

わたしの家の果樹園で、わたしは小さなおまえを見た／おまえは露に濡れた林檎を、母さんといっしょに拾つていた／わたしは二人を案内した。その時わたしは一二歳になつたばかり／だが、たわわに実のついた細枝を、爪先で立てば攪むことができた／わたしは一目おまえを見るなり、魂を奪われた(二三八―四二)。

それからどれほど時が経つたであろうか。ニューサはわたしと婚約するが、身なりをかまわぬ髭もじやのわたしに心ひかれなくなつてしまい、モプススなる「お似合いの男に嫁」いでいくことになる。ニューサはモプススのものになる。わたしはニューサへの最後の贈り物であるこの詩を残して、高い絶壁から「深い深い海の中へ」身を投げよう。特に上に引いた三八行目から四二行目を含むダモンの歌は、ヨーロッパでは昔から初恋を歌つた絶唱とされている(20)。ヴォルテールはウェルギリウスの中で最も美しい作品と言ひ、T・H・マコーレーはラテン文学の中で最も美しい作品と称めたという。河津氏も島崎藤村の「初恋」を思い出させる美しい詩と述べている(とはいへ、これはテオクリトスの「牧歌」第一、第三、第一一歌などに倣つたものというのも通説である)。

次にアルペシボエウスの歌は、「あの人の冷めた心を狂おしくさせる魔法の儀式」(六七)をとりおこない、美事に

成功して、「あの人」・ダブニスが戻ってくるところで終わっている。一種の喜劇といえようが、ただ破れた愛を魔法によつて取り戻そうとする女の執念には一種狂気の如きものが窺えることも確かである。六五行目から始まるアルペシポエウスの歌は最後の一一〇行目に至るまで全てダブニスを町から連れ戻すための魔法の儀式や呪文で満ちあふれているが、繁をいとわずその方法をまとめると次のようになる。

まず祭壇を柔らかかなりボン（色は不明）で飾り、月桂樹の枝と香をたく。ダブニスの蠟人形と粘土人形に白・赤・黒の三本の糸をまきつけ、これを持って祭壇のまわりを三度まわる。ついで三本の糸それぞれに三つの結び目を作り、「わたしは愛の鎖を作りました」と唱える。それからこの二体の人形を火で燃やす。お供えの碾割麦<sup>ひきわりむぎ</sup>を撒き、松や・にを火にくべて月桂樹の枝を燃え立たせ、その燃えさしを川に頭ごしに投げこむが、この時ふり返つてはいけない。燃えさしの焰がゆらめきながら祭壇を包めば吉！最後の三行をひくと、

ほら、ヒューラクス〔犬の名〕が戸口で吠えている／ああ、本当だろうか？ それともあれは恋する者が、自分で作り上げた幻なのか？／やめよ、呪文よ、ダブニスが町から帰ってきた。もうやめよ（一〇八一—一〇）。

第六歌の人間の悲劇的な狂気に対するウェルギリウスの限らない共感と哀感、第八歌の愛の破綻による死と、破れた愛を魔法によつて取り戻そうとする狂気の喜劇、こういった事柄が理想のアルカディアーでおこるのは、アルカディアーが生ま身の人間の生存する現世の世界であるからにはほかならない。ここではこの両歌の主題を「アルカディアーにおける哀感」としてよいであろう。

(6) 第一〇歌、紀元前三七七年春。ガルスに捧げられた歌で「牧歌」全一〇歌の一番最後の、「牧歌」への別れの曲で

ある。

ガルスの恋人リュコーリス（前三九年、ウエルギリウスの第六歌を劇場を朗読して、ウエルギリウスを一躍有名にした女優キユテーリスのこと）は、ガルスが戦場に赴いている間に、別の男に心を移しその男を追って遙かガリアに行ってしまった。ガルスに同情し、月桂樹と檉柳もマエナルスの山もリュカエウスの絶壁も、もらい泣きする。多くの牧人たち、さらにアポロン、シルヴァーヌス、パンの三神（この三神は皆恋人を亡くしている）もやって来てガルスを慰める（一一三〇）。

悲しみに沈んだガルスはアルカディアーの神パンに向って自分の詩をうたい、一時は「おれの心は決まった。森の中で、獣らの穴の間で悲しみに耐え／おれの愛を、若い木の幹に彫りつけた方がよいのだ（五三一四）」と決意するが、しかし最後は、「森よ、やはり消え去ってくれ／おれがどんなに苦しんでも、恋の神は動かさない（六三二四）」、「愛はすべてを征服する、だからおれも、屈しよう（六九）」と歌い終る。

つまり、まず、ガルスは森を歌わずに、「愛はすべてを征服する」が故に、愛の歌つまり哀歌調の愛の叙情詩を歌いたいと述べ、森の歌、牧人のアルカディアーの歌に別れをつけている。しかも後文に見るように、このガルスの詩で「ガルスに最もふさわしいように仕上げてください」といつているから、この最後の牧歌をガルスは完成することができる。また、ガルスの牧歌への別れは、また、ウエルギリウスの牧歌への別れでもあった。この第一〇歌は「この最後の仕事を、アレトウーサ（水の精）よ、なにとぞ照覧あれ」と書き出されていて、ウエルギリウスは明確な意思をもって牧歌・アルカディアーに別れを告げようとしているのである。そして重要なことは、牧歌・アルカディアーに別れを告げるこの第一〇歌が極めて牧歌的、極めてアルカディアー的な別

れであることなのである。ガルス之歌に続く最後の八行を示せば、

詩の女神たちよ、もうこれで十分でしょう。あなたの詩人はここに坐り／細い錦葵ヒナギクの莖で籠を編みながらうたいました／どうぞこの詩を、ガルスに最もふさわしいように仕上げてください／ガルスに対するわたしの愛は、早春に緑の木が勢いよく伸びるように／日ごとに大きくなってゆくのですから／さあ、もう行こう。蔭は歌い手にはよくないものだ／杜松ねずの木の蔭はからだに悪い。蔭は穀物にとつても害がある／帰ろう。満ち足りた山羊たちよ。宵の明星が現われた。さあ、家へ帰ろう（七〇—七）。

エルウィン・パノフスキーはこの第一〇歌の最後の一行と第六歌の同じく最後の二行「宵の明星が若者たちに、羊を小屋に集め数を数えよと促しながら／不満顔をした空にすすみ出るまで」を引きながらこう述べている。「ウエルギリウスの理想的アルカディアでは、人間的苦悩と超人間的なほど完璧な環境とが、不協和音を発している。この不協和音は、一旦感じられると、どうしても解消されなければならず、そして詩に対するウエルギリウスのもつとも個人的な貢献と思われるあの夕暮の悲哀と静穩の混合の中で解消された。そして少し誇張していえば、彼が夕暮れを「発見した」といえよう。…ウエルギリウスの『牧歌』の最後のところで、われわれは夕暮がひっそりとこの地上をおおうのを感じるのである」。このアルカディアの暮情の中でウエルギリウスは『牧歌』に別れを告げる。

『牧歌』は内戦の一四年、イタリアの最も悲惨な政治状況下、カエサル暗殺の翌年から、内戦の帰趨のいまだ定まらぬ紀元前三七年の間に作られた。もちろん全ての作品がその時代背景に還元できるわけではないが、にもかかわらず、詩人もまた創作の主体として、時代との鋭い対話なしに思想を表明しえないと考えられる。第二歌（独白ではあるが）、第三歌、第五歌、第七歌に見られた「歌の共同体」は内戦に明け暮れる世相の対極の像として大きな意味をも



つ。この対極像を描き出したこと自体に、悪しき政治への暗黙の抗議がある。さらに土地没収を扱う第九、第一歌はこの安らぎ(オライウム)(otium)に満ちた共同体・アルカディアーへの権力の暴力的侵入であり、ウエルギリウスは極めて巧妙に、しかし鋭くこの時代を告発する。ここには詩人ウエルギリウスの勇氣と時代の証言者としての姿が窺える。われわれはこの章の冒頭部分と第九歌の説明の所で、ウエルギリウスのこの態度を、ジョン・ロールズによって市民的不服従 civil disobedience あるいは良心的拒絶 conscientious refusal と呼んできたが、脱政治的 depolitical にして無政治的 apolitical なアルカディアーこそこの良心的拒絶を本質とするものなのである。第一歌でウエルギリウスはカオスを鎮定する救済者・オクタウィアヌスを発見し、第四歌では「子」<sup>(12)</sup> 供の誕生を契機として黄金時代の到来を夢みる。アルカディアーが幻想として現われざるを得ないのは、詩人は詩壇において権威をもつかも知れないが、現実的な政治権力を持たぬからであつて、全世界のアルカディアー化は権威と権力の双方をもつ詩人以外の者に託さざるを得ないからである。詩人は詩人的直感でもつて、どうしても到来してほしい世界の平和を望む。しかしこの平和の安らぎの世界といえども、現実人間が生存するこの世界であつて、人間の悲劇・狂気をぬきにしては考えられぬ。こういった人間の問題性をかかえつつも、悪しき時代に対抗する理想郷・アルカディアーを描き、未来の光明を提示したのがウエルギリウスの『牧歌』の世界、アルカディアーの世界なのである。このウエルギリウスのアルカディアーが以後のアルカディアーの原型となる。

注

(1) "The Works of Vergil with a Commentary"の第一版から第三版まではJohn Coningtonにより、第四版以降はHenry Nettleshipによる増補版である。第一版の出版年は不明、第二版は一八六五年、第四版は不明、第五版は一八九八年ロンド

- ンから。我々の使用した版は第五版のリプリント版で、一九六〇年発行。ウェルギリウスの古い伝記についてはネットルシッ  
 プによる「ウェルギリウス伝」(同上書XViii) 参照。
- (2) Sir John E. Sandys, "A History of Classical Scholarship", vol. I, N. Y., 1958, pp. 196-97.
- (3) スエトニウスについては「国原吉之助訳『ローマ皇帝伝』下(岩波文庫 一九八七)の訳者解題参照。下文の引用は三  
 七一頁。
- (4) 河津千代『牧歌・農耕詩』(未来社 一九八四)の冒頭に詳細なウェルギリウス伝がある。以下の補足説明中では(河  
 津)と略記する。J. Wright Duff, "A Literary History of Rome, From the Origins to the Close of the Golden Age",  
 London, 1953 (first ed. 1909), ff 319 p.
- (5) 松田治『ローマ神話の発生』社会思想社 一九九二。塩野七生『ローマ人の物語』I新潮社 一九九二。E・マイヤー  
 『ローマ人の国家と国家思想』鈴木一州訳 岩波書店 一九七八(原書一九四八)。J・ブライケン『ローマの共和政』村  
 上淳一・石井繁郎訳 山川出版社 一九八四など。
- (6) マイヤー 上掲書 二七八頁。
- (7) 以下の「牧歌」の時代背景については、上掲マイヤー、ブライケン、塩野のほか、I・モンタネッリ『ローマの歴史』  
 藤沢道郎訳 中央公論社 一九七六、弓削達『ローマ帝国論』吉川弘文館 一九八二(一九六六)、同『素顔のローマ人』  
 河出書房新社 一九七五、浅香正『クレトパトラとその時代』創元社 一九八五、村川堅太郎編『プルトルコス英雄伝』下  
 (ちくま文庫 一九八七)所収の各伝、鶴見祐輔訳『プルトルク英雄伝』8(潮文庫 一九八四)所収の「マークス・ブルー  
 タス」伝、スエトニウス『ローマ皇帝伝』(上)(国原吉之助訳 岩波文庫 一九九〇)所収のカエサル、アウグストゥスの  
 各伝、The Loeb Classical Libraryを収めるCicero, Appian, Dioの各書、Cicero, "Philippics" (そのIntroduction  
 も)、Appian, "Roman History"全五冊中の最後の二冊の"The Civil Wars" Book VとDio, "Roman History"全十  
 冊の第五冊XLVII (47)章以下、なお本文中の叙述は一一注記しなかつたが、古典的名著を収めるRonald Syme, "The

Roman Revolution”, Oxford, 1952 (1939)に大いに裨益を受けた。

(8) 第九歌の成立年を河津氏は「前三九年」という。ここではコンントン、ダフ説に従って「前四一年」とする。河津『牧歌・農耕詩』一五七頁、Duff, op. cit. p. 322, Conington・Netteship, op. cit. p. 21.

(9) 前四三年十月の第二次三頭政治の成立で、前四〇年までの執政官が前もって決定され、その通りに実行された。前四三年の残余期間(二ヶ月弱)をP・ウェンティディウスとC・カルリナス(二人とも故カエサル派)、前四二年はレビドゥスとブランクス(アントニウス派)、前四一年はP・セルウィリウスとL・アントニウス(アントニウスの弟)、前四〇年はA・ポリオ(アントニウス派)とD・カルウィヌス(オクタウィアヌス派)である。R. Symeの巻末のコーンズル表も参照。

(10) ブライケン「ローマの共和政」一七三頁P. A. Brunt, “The Fall of the Roman Republic and Related Essays”, Clarendon Press, 1988, p. 268. 下文の「オーティウム」(閑居、安らぎ)の新解釈については、Thomas G. Rosenmeyer, “The Green Cabinet”, Univ. of California Press, 1969, pp. 67-8. 「オーティウム」については、なお、アラン・ミシエル『ローマの政治思想』国原吉之助・高田邦彦訳 文庫クセジュ 一九七四 頁九〇以下のセネカの「閑居論」、弓削達『素顔のローマ人』頁二七三、三〇七も参照。

(11) J・P・V・D・ボールズドン編『ローマ人 歴史・文化・社会』(長谷川博隆訳 岩波書店 一九八二)所収のC・ハーディー「三人の詩人」、頁三八四―八五。

(12) セバスチャン・デ・グレージア『疏外と連帯』佐藤智雄他訳 勁草書房 一九七四(原書一九四八)の「第十章 尖鋭アノミーへの適応」など参照。

(13) G・ハイエット『西洋文学における古典の伝統』柳沼重剛訳 筑摩書房 一九八五 上巻一七二頁。しかしローゼンメイヤーは「田園詩のオーティウムは…逃避主義者の心理過程ではない」とみている。(“The Green Cabinet”, p. 68). 重要な指摘と思われる。なおまた、稲田菊太郎『ウェルギリウス論考』(見洋書房 一九七九)も裨益する所大きい書である。

(14) われわれの説く「アルカディア」の古代的事例として、前三七五年頃のプラトンの『国家』(四九〇c〜四九七a)

アルカディアの誕生・ウェルギリウス

にこうある。「完全な哲学者」は最善の国体、哲人政治でその能力を十全に発揮しうるが、「多数者の狂気」が支配するいわゆる衆愚政治にあつては、④国政に関して誰一人何一つ健全なことをしていない。⑤正義を守るべく戦う同志なく、⑥万人の狂暴に抵抗すれば身を亡ぼす、との最悪の政治環境に置かれる。この状況下で完全な哲学者はどう生きるか。プラトンは続けていう。「すべてこうしたことをよくよく考えてみたらうで、彼「完全な哲学者」は静かに自分の仕事だけをしていくという途を選ぶ。あたかも嵐のさなか砂塵や強雨が風に吹きつけられてくるのを壁のかげに避けて立つ人のように、彼は他人々の目に余る不法を見ながらも、もし何とかして自分自身が不正と不敬行為に汚されないままこの世の生を送ることができれば、そしてこの世を去るにあたっては美しい希望をいだいて晴れ〜と心安らかに去って行けるならば、それで満足するのだ」と。プラトンのこの思想は、ローマ時代には「閑居論」<sup>オキヂョウ</sup>として、ホラティウス、小プリニウス、セネカらよって展開される。セネカは「閑居論」で、どんな政体も心底から満足できるものではないから、賢者はできるだけ政治にかかわりあわぬようにせよ、これは「黙諾の沈黙」ではなくて、「拒否の沈黙」であり、この行為の「英雄的性格」は、時の権力者の「権威の失墜」をもたらすものであるとみた(アラン・ミシユル『ローマの政治思想』頁八六〜九)。ウェルギリウスの「牧歌」・アルカディアもまた悪しき政治への「拒否の沈黙」である。「オーティウム」にひそむ「良心的拒絶の性格」に注目しておきたい。

- (15) Paul Alpers, "Community and Convention in Vergilian Pastoral", in John D. Bernard ed., "Vergil at 2000", AMS Press, N. Y., 1986, p. 44. Eleanor W. Leach, "Vergil's Eclogues — Landscapes of Experience" Cornell U. P., 1974, p. 170. また Duff, op. cit. p. 322.

(16) 引用はハイエット『西洋文学における古典の伝統』上二七〇頁、またアルカディアの墓については、E・パノフスキー『視覚芸術の意味』(中森義宗他訳 岩崎美術社 一九七一)の第七章「われ、また、アルカディアにありき」参照。また Duff, op. cit. p. 322. またチャールズ・セガルからの引用は Charles Segal, "Poetry and Myth in Ancient Pastoral" Princeton U. P., 1981, p. 272.

- (17) Duff, op. cit. p. 324., Arthur O. Lovejoy and George Boas, "Primitivism and Related Ideas in Antiquity", *OctagonBooks*, N. Y., 1980 (1935) p. 85., Annabel Patterson, "Pastoral and Ideology—Virgil to Valéry", *University of California Press*, 1987, p. 90.
- (18) アルゴ船については、シヨバンニ・カセリ『アルゴ号の大航海』石井勇訳 評論社 一九九三。この原作は『The Loeb Classical Library, Greek Authors, Apollonius Rhodius, "Argonautai"』である。呉茂一『ギリシャ神話』新潮社 一九七七(一九六九) 頁四四以下にアルゴ遠征の詳述がある。
- (19) 男女の人間の誕生については、オウイディウス『変身物語』(中村善也訳 岩波文庫 一九八九)第一卷三三二〇行以下。ヒュラースについては呉茂一前掲書三三四、三四八頁。パシパエについては呉前掲書二八二〜八四頁。プロイトスの三人の娘については呉前掲書一六九〜七〇頁。アタランテーについては呉前掲書二四五〜四九頁およびトマス・ブルフィンチ『ギリシャ・ローマ神話』大久保博訳 角川文庫 一九九二 二五六〜六〇頁。パエトーンについては呉前掲書二九一〜三〇頁およびブルフィンチ前掲書八三〜九四頁。スキュラについてはブルフィンチ前掲書一八四〜八七頁。テーレウス王とピロメーラ、プロクネーについては呉前掲書二九三〜九四頁。
- (20) M. Owen Lee, "Death and Rebirth in Vergil's *Arcadia*" *State Univ. of New York Press*, 1989, p. 60., Sir John E. Sandys, op. cit. p. 186., 河津千代『牧歌・農耕詩』頁一四六。
- (21) E. パノフスキー『視覚芸術の意味』(岩崎美術社)二七九頁。
- (22) ジョン・ロールズ『正義論』(矢島鈞次・篠塚慎吾・渡部茂訳 紀伊国屋書店 一九七九)二八二、二八五頁など参照。
- また Hugo A. Bedau, "Civil Disobedience in Focus" (*Routledge*, London and N. Y., 1991) ① Introduction を参照。